

世界之目録叢書

71

411

近世露西亞

此書露人最近の著によ
り露人とて自らを説
明せしめたる者也

026837-000-4

71-411

近世露西亞

占部 百太郎 / 著

M32

ADF-0018



(1)

讀者に告白す

一、予の淺學薄識を以て、敢て露西亞問題を解釋せんとしたるは、邦人の多數をして露西亞の國狀を知らしむるの、**最要なりと感じたればなり。**

眇たる小冊子、固より大問題中の最大問題たる露西亞を解釋するに足らずと雖も、精細、枝葉に屬したる件は暫く之を他日に譲り、簡易にして大体に亘れる智識を、偏ねく邦人に**擴布紹介するの、**目前の要務なりと感じたるか故に、其文字の如きも、**努めて平易明快ならんことを期したり。**

露西亞に關したる從來の著書、多くは皇帝及び政府の歴史に精にして、**人民の粗なるの嫌ありき、**これ著者か多くの力を人民の狀態に致したる所以なり。

一、地名人名の如き、可及的原音に近からしめんと睚めたれども、尙は誤謬の箇處あらば、讀者幸に叱正の勞を吝しむ勿れ。



一、露國皇室の秘事婦人問題等に就きて、言ふべき事此他尙ほ多
 きも、此等は他日を待つて補ふことあるべし。
 一、本書の材料は、露國人エル、テ#コミロヴ氏著『露西亞』に負ふ
 所最も大なり。

明治三十一年臘月十七日赤阪僑居に於て

鶉濱生識

近世露西亞 目次

| | | | | |
|----|--------------------------------------|-------|----|---|
| 第一 | 序論 | | 一 | 頁 |
| 第二 | 露西亞國內の非「スラヴ」民族 | | 五 | |
| | (1) 芬蘭人 (2) 巴爾的地方人種 (3) 波蘭人 (4) ベッサラ | | | |
| | ピア及び其他の地方人種 (5) 土耳其斯坦人 | | 二五 | |
| 第三 | 「スラヴ」人種の東移運動と其三民族 | | 三二 | |
| 第四 | 哥薩克兵 | | 三六 | |
| 第五 | 露國に於ける日耳曼人と猶太人 | | 四〇 | |
| 第六 | 露國の農民社會 | | | |
| | (イ) 農民社會結合の起原 (ロ) 多數階級勢力と主 | | | |
| | 權者 (ハ) 農民社會の組織と土地分配 (ニ) 私有財 | | | |
| | 産制 (ホ) 農民の蒙昧——政治の不進歩 (ヘ) 農民の精 | | | |
| | 神的革新 | | | |

第七 露國の上流社會……………五八
 (1) 帝權の伸張と其藩屏(2) 僧侶(3) 貴族(4) 都民
 第八 經濟界及び產業界の狀態……………七六
 (い) 天然の富源(ろ) シリミア 戦争後の經濟事情
 (は) 工業界と保護政策の失敗(に) 露國財政の紊
 亂
 第九 思想界の狀態……………八六
 (1) 『有識者』の勢力と所謂『虛無黨』の勃興(2) 露國
 の大學校(3) 露西亞文學の狀態
 第十 政治界の狀態……………一一一
 (イ) 行政の腐敗(ロ) 露西亞の政黨
 附錄 露國兵勢一覽表……………一二七

近世露西亞

占部百太郎著

第一序

論

鯢々として歐亞兩大陸に跨り、約九百萬方哩の版圖と一億強の人口
 とを有し、國家としての壽命は未だ六百年に充たすと雖ども、其進
 歩の長足にして發達の順正なる、而も現に其膨脹の駭々として底止
 する處を知らざる、世界は遂に哥薩克兵の馬蹄に蹂躪せられ、「ス
 ラヴ」民族に統一せらるべしと、諸強をして危惧戰慄せしむるは、
 嗚呼これ露西亞帝國の現勢にあらずや。
 然り露西亞は世界の一大恐怖なり、否な何人も解釋せんと欲して能

はざる一大疑問なり、其が外交政略の敏活隱險なる往々思議すべからざるものあり、去れば一問題一提議興起する毎に、世界列國各々揣摩臆測を以て之に對する手段を廻らすが故に、常に其の致す所とならざる者稀れなり、これ畢竟列國の政治家が露國を運轉せしむる一大動機を知らざるが爲めなり、其中に伏在せる秘密を闡明せざるが爲めなり。

從來露西亞を解釋せんとする者、其政府を以て唯一題目となさざるは無し、これ其解釋の正鵠を得ざりし所以なり、露西亞を解釋せんと欲せば須らく先づ其人民を研究せざるべからず、露國は名うての専制政治にして、皇室及び政府の權力絶大なるは固より言を須ひずと雖も、露西亞帝國をして今日の露西亞帝國たらしめたるは、歴代帝王の力にあらず又其政府の功績にもあらず、實に其人民の勲業たらずんばあらず、故に露西亞史を繙く者は國民的領土の増大は、常に往々國家領土の増加に先づ、特異の現象に注目せざるべからず、

予か此提言の最も適切なる反証を得んと欲せば、其國家的生存の危機に就きて觀察するに如くは無し、懦弱なるセオドール一世の治世及び第十七世紀の初年に於て、瑞典若くは波蘭に征畧せられし時には、露國は殆んど政治機關の運轉を休止せし程の、憐むべき情勢に陥りたりき、而も露國人民の活動は駭々として休むこと無かりき、彼等は常に人種的競争の勝利者にして、其邊疆に於ける領土は恰かも幾何級數を以て増加したりき、加之上の如き危急存亡の秋に際して一國を累卵の殆きより救出せしは、常に所謂愛國者の一群にてありき、而して愛國者とは皇帝に非ず貴族にあらず、又僧侶若くは官吏にもあらず、實に人民自身にてありしなり、一たび愛國者の聲を聞かんか、开は倏忽に全國四境に反響し、義勇兵は到る處に勃興し其公憤義烈は外敵を掃蕩し悉さずんば已まざりしなり、此の如き皇室及び政府以外の一大潜勢力は、古來幾多の露國征服者をして蹉跎失墜せしめたり、嗚呼電光石火の勢を以て北歐を蹂躪したる『北海

の狂人』チャールズ十二世も、撼天動地歐羅巴を席捲せし不世出の大英雄拿破侖も皆同一失敗を繰返さざるは無かりき。疾風の如く來り疾風の如く去りたる、帖木兒の帝國は僅かに十年の壽命を維ざたりき、向ふ處敵無く半月の國旗長へに翻々たるべしと想望せられし「オットマン」帝國は、今や半死の境に瀕せり、露國と殆んど時を同ふして勃興したりし波蘭王國今將た何くにか在る、嗚呼古來幾多の帝國皆一度は繁榮し、而して遂に一度は亡滅若くは衰頽せり、然るに露西亞帝國は如何、露西亞帝國は生存せり、而して常に發達せり、否な未だ發達の頂点に達せざるなり、而かも青春多望にして前途洋々たり、其の進むや人爲的に生存せし古來の諸大國とは自から步趨を異にす、蓋し露西亞の發達膨脹は建國以來未だ瞬間も休止せざるなり、將來と雖とも容易に休止するか如き事無かるべし、然らば此等の大活動を演ずる露國人民なる者は、果して何等の成分より組織せられたるか、これ予が論述せんと欲するところなり。

第二 露西亞國內の非「スラヴ」民族

(1) 芬蘭人 (2) 巴爾的地方人種 (3) 波爾人 (4) ベッサラビア其他の地方人種 (5) 土耳其斯坦人。

東の方東塞加より西の方ポドリヤ迄、凡そ四千里の長さ互れる、尤然たる露西亞帝國を組織せる一大臣民は、實に七拾以上の國民的精神を異にせる民族より成立せるものなり、是等の各民族は皆夫れ々の言語、風俗、歴史、政体を有し、中には先天的に露國を敵視し、露政府は警察と軍隊の力を假りて、漸くに之を壓伏したる民族甚からざれば、讀者をして一見露國人民の國民的大運動を妨礙掣肘するか如き事無きやを疑はしむと雖も、これ反つて露國人民が國民的結合の、極めて鞏固なる所以を証明するものなり、何となれば露國臣民一億萬餘人中、真正露西亞人種は六千七百萬人にして、

他民族は三千三百萬餘人に過ぎず、而も其中の多數は水草を追ふて移轉する蠻族に非れば、自然に露國人と同化混淆しつゝあるか、或は生存競争に依りて不幸にも漸次亡滅しつゝあればなり、實例を以て之を証すれば、「スラヴ」人種（即ち眞正露國人）を除きては、露國內最多の民族たる芬蘭人種フィンランドと雖も、帝國總人口六分の一に過ぎずし、尙ほ其中に十一の小區別あり、又西比利亞土人の大半は眞正露國人種なり、其他波蘭ポーランド、ベッサラビアの一部、リシエニア、高加索地コーカサス方等中に露國人種より文明の發達したる者ありと雖も、皆露國人種の敵手たるに足らざるなり、此の如く眞正露國人種が他民族に對する優勢は、彼等が屢ば國民的結合を鞏くし露西亞をして今日の盛運を致さしめたる所以なりと知るべし。

以上は「スラヴ」人種が國民的精神の、如何に鞏固なるかを証せるものなりと雖も、之が爲に毫も帝國領内に於ける幾多人種に關する、大疑問を輕重するに足らざるなり、否な此等各種の國民的精神

を研究するは、實に露西亞自身を解釋する、一大方便ならずんばあらず。

予は説明の便利を圖りて、以下露國人民を「スラヴ」人種、非「スラヴ」人種の二種に大別せん。

芬蘭人種

(1) 芬蘭人種 露西亞本部の西北境、即ち瑞典との間に介在せる非「スラヴ」的一大邦土を芬蘭フィンランドと稱す、幅員卅八万方「キロメートル」人口二百萬人を有す、此地は六百年以前に當りて瑞典に征服せられ、(千七百四十一年テヘルシット平和條約に依りて露の手に歸せり)現に廿五萬人の瑞典人種を包含するはとせば、現今尙ほ多少瑞典文明の痕跡を存すと雖も、一たび露皇の配下に屬してより、露政府は多數を制せる芬蘭民族が、瑞典人種に嫌焉たらざるを奇貨とし、能ふべき限りは其地固有の言語、及び文物、制度を保存するを許容し、努めて瑞典文明を排斥せしめたり、去れば芬蘭人が瑞典文明に遠かると共に一層芬蘭化し、芬蘭化すると共に益々露國との合同鞏固た

るべきは、論理の到着するころなりと雖ども、事實は決して然らず
 聖彼得堡より芬蘭の境界に達するには、一時間の汽車旅行にて足る
 べきも、兩人種間の冷情は吳越も管ならず、芬蘭人が露都の革命を
 感ずるは、恐らく巴里の政變に對すると異るところ無かるべし、此
 の如き兩人種の冷眼は、要するに彼等が各自に其國民性を異にせる
 に因るべしと雖ども、是が大原因は一に懸つて芬蘭が、嚴峻なる武
 斷政治を以て君臨する露西亞政府を恐怖するに在り、彼等は二見全
 く露政府の羈絆を脱し、自主自由政治を行ふが如きも、其憲法たる
 や不完全なる中古風の儘にして、嘗て一たびも之が改革を許されず
 不便不利堪ふべからざるのみならず、彼等は熟々芬蘭の憫むべき衰
 運を見たり、又亞歷山一世の爲めに嘗て其憲法を撤回せられしを、
 須臾も記憶より除去する能はざるなり。
 露に對する此の如き恐怖心は、芬蘭の政治をして萎靡沈滞せしめ、些
 かも國運の發達進歩を來たすこと無きが故に、彼等は絶えず、「吾人

は露西亞に依りて何を贏ち得つゝある乎、』『専制國との合同に因り
 て吾人が蒙る不便利を、償ふに足る利益は果して何れに存する乎、』
 等の疑問を絶えず自問しつゝあり。
 若し強て芬蘭が露に依りて益する点を覓めば、唯だ經濟上の關係に
 のみ存すべし、芬蘭の地には露の需要する一物をも産せざるに引き
 替へ、芬蘭人は露國産の小麥に依りて生活し、且露國は芬蘭の製造
 品を賣捌く唯一の市場たるなり、これ彼等が心ならずも、露の支配
 に甘んずる所以なり。
 翻つて露の見地より芬蘭を觀察せんか、芬蘭の地位たる外國と境域
 を接するにあらず、緊要の港灣を有するにあらず、文化の以て輸入
 參酌すべきものあるにあらず、其土地甚だ不毛にして産業亦隨つて
 發達せず、然らば何が故に露國は此地方を領有せざるべからざるの
 必要ある歟。
 曰く在り、大に在り、既に述べし如く露の首都聖彼得堡は、芬蘭と

露に對する唯一の武器

巴爾的地

の國境に近接し、且つ芬蘭灣の北海岸は今尙は凡て芬蘭の領にして若一朝外寇にしてスウェーデン、ポルグの砲臺を根據とせば、敵艦は容易にクロンスタッド及び聖彼得堡を封鎖することを得べし、一言すれば芬蘭にして一たび露の敵手に落んか、其は露に對するの由々敷武器たるべし、否な往時露瑞間の戦争に於て、芬蘭は正しく這般の武器たりしなり。

芬蘭と露西亞は此の如く緊密の關係を有するに拘はらず、芬蘭人が露政府に對する不満の聲は益々熾んならんとし、反對に露政府を圍繞せる露國反動派は、政治上に於ては芬蘭の特權に容喙せんとし、經濟上よりは莫斯科製造家を保護して、芬蘭人の競争を杜絶せんとし、未だ重大の危機に瀕せずと雖も、反動派の威權にして露都に暢ぶることあらんか、爲めに容易ならざる危禍の必無を期すべからざるなり。

(2) 巴爾的地方 芬蘭の對岸露國本土と巴爾的海とを隔絶する、非

唯一の窓

日耳曼人の文明の侵入を妨害す

「スラヴ」的領土を巴爾的地方バルチックプロヴィンツと稱す、此地にはレウエル、リガ、ウヰンドウ、ポルト、バルテック等重要な諸港ありて、西方ドナ河亦此地を貫きて海に注ぎ、露國貿易に取つては實に咽喉の樞地にして、露西亞が依りて以て歐羅巴を窺見する唯一の窓牖なり、去れば露は此地を獲んが爲めには、幾多の歳月と高價の戦争とを辞せず、死力を盡して争ひしが、ピーター大帝の治世遂に瑞典、波蘭等の諸敵を排して、全く其領土と爲しき。

此地は元と「リシエニア」人及び芬蘭人種の住處にして、露國人の移住せしものもありしが、十一世紀の頃、日耳曼人種の東移運動に依りて原住民を壓伏し、之を奴隸の地位に墮せしむ、時恰かも露國は韃靼人の鉄鞋に蹂躪せられし際なりしかば、之を如何とも爲す能はず、徒らに日耳曼人の侵略に委したりき、去れば日耳曼人種は暴威を以て土民を虐待し、一方には歐洲文明の露に渡來せんとするを妨害したりき、露西亞が數百年間野蠻の境に停滯したりしは、此等

日耳曼人の主我政策の罪多きに居る。

日耳曼人の權力此の如く強大にして、多數の土人は憐むべき奴隸の境遇に沈淪し、政權、商權等盡く日耳曼人の特權に歸し、日耳曼貴族は五千九百廿四人の少數に過ぎざるも、殆んど全土の四分の三を占有するが故に、柔順なる農民も過去卅年來漸くに不滿の聲を發し露西亞政府に向つて政治上及び社會上、日耳曼人と同等の權利を要求し來り、又連りに土地均分論を絶叫して、從來土地分配の比類無き不公平を匡濟せんとし、日耳曼人が之を鎮壓せんと努むるにも拘はらず、其反抗の聲は益々大ならんとするの傾向あり、其狀態吾人をして轉た愛爾蘭を聯想せしむ。

然るに怪訝なるは露政府の舉措なり、其本國に於ける輿論が、常に此等國民的反抗者に同情を表しつゝあるに引き替へ、其政府は日耳曼貴族の特權を認容し、彼等をして文武官の地位を獨占せしめ、更に政体及び社會組織の變更に意無きものゝ如し。

(3) 波蘭 ポイランド 波蘭は千七百七拾貳年以來、三たび普、塊、露三國の爲

めに割取せられ、己に世界の政治地圖に於て之を看出す能はずと雖ども、波蘭人は今尙ほ波蘭本土其他南部露西亞に繁殖し、其數本土のみにて五百二十三人に超ゆ、昔時の波蘭人は西歐の文明を呼吸し、極めて自由なる制度及び社會生活を採用したりしかば、一時は國力大に發達して、現今のリシユエニアを初めとして、白露西亞ポイトロニア小露西亞等も其版圖に歸し、拾六世紀には巴爾的地方好んで合同を諾し、十七世紀に於ては將に露都莫斯科を衝かんとするの勢ありき、然るに波蘭の憲法は全く貴族主義にして、あらゆる權利、知識富は貴族一階級の專賣物なりしがば、其政治及び社會は漸くに腐敗し來り、遂には一國を擧げて、貪婪厭くことを知らざる豺狼の群に投ずるに至れり。

史家の所謂歴史的波蘭は波蘭本土、リシユエニア白露西亞、及び小露西亞の四地方にして、リシユエニアの土人は波蘭人及び露人と異

れる人種、又白露西亞及び白露西亞の住民は、何れも露國人種の一部なれば、一見波蘭の勢力感化少きが如しと雖ども、こは一國の狀勢を強ちに人種學上よりのみ觀察せんとするものにして、此等地方が波蘭の配下に屬せし間に、如何に波蘭化せられしかの事實を知らざる齊東野人の言なり、歴史的波蘭今や滅亡して跡なく、其本土を併せて露國の管下に歸せしと雖ども、波蘭人及び此等波蘭化せし人種は未だ生存して、熾んに露政府に向つて反抗しつゝあり。

波蘭國衰滅の顛末を詳述するは、固より此小冊子の能ふところにあらずるなり、故に予は極めて其大要を挙げんと欲す、波蘭の滅亡は第一は貴族（即ち大地主）の專權に因れり、官吏の収斂に因れり、朋黨の軋轢に因れり、諸強國の干涉指喉に因れり、非波蘭人種（即ち奴隸視せられし土人等）の叛亂に因れり、此の如くして波蘭は内憂外患交も至り、遂に千七百七十二年世界歴史あつて、悲惨中の最も悲惨なる運命に遭遇せり、波蘭と雖ども全く愛國志士を産せざり

しにわらず、第一次分割の慘運に遭遇せし後、波蘭の愛國者と臥薪嘗膽千七百九拾壹年、遂に「クローデター」を執行し所謂五月三日の憲法なるものを制定せり、此の憲法は第一世襲國を宣告し、第二專擅否認可權を廢止し、第三多少政權を市民に分與せり、こゝに於ては波蘭の中興を唱へしも、貴族等の腐敗は到底政治的資格に適せず、内乱再び興起し越えて一年、三國は第二次波蘭分割策を斷行せり。第二次分割後と雖ども、貴族は自家の特權を犠牲として國家の復興を圖らんとせず、人民亦自己を奴隸とせる國家に對して報効を思ふこと無く、内訌益々甚しく、末路の英雄マデアウチ、コスツァッコ奮起義軍を擧げたりと雖ども、朽癩せる大厦は一木の得て支ふるところに非ず、可憐好漢は奮戰苦闘の後徒らに捕虜の身となり、失望の極「吁、大事去れり！」と絶叫せり。

是に於てか千七百九十五年、諸強國は第三次波蘭分割策を執行せり。國家としての波蘭の此非運は、偶然にも多數人民に初めて教育の普

波蘭は産業上の競争に依り露國を壓倒せん

土地均分法

及を誘致したりき、從來貴族の特有物なりし文學及び科學は一般に流行するに至り、産業亦非常に發達して生産力を増加し、政治上に於て露國に克復せられたる波蘭人民は、教化及び産業上の競争に依りて露を壓倒せんと睨めたりき、斯く數十年間蓄積せし國力は漸くに充實せられ、爾來幾度か露政府に反抗の暴徒蜂起せしと雖ども、此の如き舉を贊助する者は常に上流の貴族のみにして、白露西亞及び小露西亞の非波蘭人種は反つて露軍を幫助して、暴徒鎮壓の義勇兵を募集せし程なりき、去れば波蘭か一獨立の日に接するも、此等の地方を要求するの、如何に不正當なるかを知るに難からず。然れども此の如き數度の叛亂は、遂に露國の有名なる政治家ニコラス、ミリオウテフンをして波蘭の大改革を行はしめ、先づ貴族の勢力を削減して一種の土地均分法を斷行し、千八百七十四年には貴族と農民との所有地凡そ等一となれり、之と同時に兩國の學問社會は漸くに接近し來り、從來相互の惡感情も自ら融和し、波蘭人にして露

國の大學に遊びし青年は露の學生と相親み、各自人民の爲めに協心戮力して、自由主義の發達に盡瘁せんと相約するに至り、此の如くして露の文化は滔々として波蘭に入り來ると共に、露西亞は波蘭製造家の爲めには重要な市場にして、兩國の經濟的關係は緊密を加ふるあれば、予は信ず、露政府の對波蘭策にして甚だしき不法壓制の舉に出るにあらざるよりは、波人は決して些少の目的の爲めに、濫りに干戈を弄する者にあらざるなりと、然るに露政府は只管警察と武力とを盾として、波蘭に不法の干渉を試み、暴横壓虐至らざる無く強て波蘭を露國化せしめ、波蘭國民を全く世界より剿滅せしめんとするの非政を行ひつゝあり。

嗚呼波蘭人か此等の桎梏より脱するには、ヴサステラ河畔尙ほ幾多の鮮血を墮さるを得ざるべく、縦し又彼等幾何程の血を流すとすも、其は遂に無益の徒勞たるを免れざるべし、何となれば波蘭人が露軍と戦ふは、恰かも螳螂の龍車に向ふと同じければなり。

吾人は信ず、波蘭が其獨立を回復するの日は、到底露國人自身が解放の後に非ざれば到來せざるべきなりと。

(4) ベツサビア、及び其他地方 (イ) ベツサケスビア はダニュープ河を隔て、ルーマニアに界する一小土にして、露皇が露土戦争の時不法にも、其同盟國たるルーマニアより強奪したるものなり。

(ロ) クリミア には韃靼人、希臘人、日耳曼人、猶太人等多少住居すれども、住民の殆んど六割八分は露西亞人なり。

(ハ) トランス高加索地方 (ヂョルジア及びアルメニアを含む) は各人種の雜居地にして、歐亞兩大陸の通路に當り征服者にとつて偏強の好餌たるが故に、國民的問題は一段の重要と紛糾を加ふるものあり、此地方の住民は露國人殊に哥薩克兵多しと雖ども、高加索山中には美貌と勇氣と獨立心に富みたる土人棲居し、時に出沒して露國人を鹵掠し、大に露政府を悩ますことあり、彼等は元と回教信者にして、土耳其政府の管下に屬せしことありしが故に、土政府に同情

を表し、爲に露土の關係をして一層危難ならしむ、然るに此等民族は決して怠惰浮浪の人民に非ずして、苟も鋌を入れるに足る地は、荆棘を排し岩石を碎き力耕に至らざる處なし、又彼等の中チエトチエニア族の如きは、平等と名譽の觀念に富み、又最も復讐心強く、時に生命を賭するに至ることあり。

ヂョルジア は高加索山脈の南方に位したる富饒の邦土にして、マセドニアの亞歴山大王の頃、已に文化の發達せるものありて、爾來或時は高加索地方の霸主となり、又或時は亞刺比亞人韃靼人及び波斯人の征服する所となりしが、十七世紀の頃、高加索山民及び波斯人の爲めに却掠せられ、不得已同宗教たる露の救助を請ふに至り、千八百〇一年ヂョルジ十三世の時、遂に一國を露帝に捧げて、高加索山民の鹵掠より遁れんことを要めたりき、是に於てか露政府は山民に向つて五十年戦争を宣告せしに、山民の勢甚だ猖獗にして、往々露軍を悩ませしが、彼等は元と烏合の衆にして國民的一致を欠ぎ

たれば後には痛く敗北して、露人は至る所奪掠と殺戮を逞ふし、爲めに山民の多くは土耳其に渡り、其保護を請ふに至りぬ、然れども一百萬人に超えたる殘徒は、尙ほ露政府に服従せざることを以前の如く時々暴發せしかば露政府は不得已多數の軍隊を以て之を壓伏せんとしたれども、彼等は露土戦争の時甚しく露軍の妨害となりたりき、チヨルシアは斯の如く露の庇保に依りて掠奪を免れ、又露の手を経て歐洲文明の風に薫じ、頗る富榮の狀を呈せしも而も、チヨルシア人が露政府に對して些かも温情を有せざる所以のものは、これ畢竟露の專制政治が一方に於て、國力の發達を妨礙するものあればなり、露政府は只管チヨルシアに國民的獨立の思想起らんことを患ひ、チヨルシア教會、裁判制度及び地方議會を廢止し、露の監督官亦頻りに、出版物及び文學の傳播を妨げチヨルシア人がテフリスに大學を建設せんと切望するに係はらず、堅く之を拒否する等干涉壓制に至らざる無し、加之其經濟上の利益も、露國産業の爲めに犠牲に供

せらるゝことあり。

アルメニアは嘗て獨立國たりしも、後其大部分は土耳其の屬國となりき、此國一たび露國の版圖に歸するに至るや其地位露の國境に在るが故に、隨つて獨立の目的を達し易きを以て、露政府は爲めに疑心暗鬼を生じ、アルメニアが土政府の管下に在りし時よりも一層壓制の政策を採り、一時に千余の國民的學校を閉鎖したりき、此の如き暴戾なる自國化的手段は痛くアルメニア人を憤激せしめ、失望怨恨の極遂に國民的大運動を始めたりき。

『露西亞の暴君等は十年以來自己の印璽を保証として、アララット國の獨立を吾人に約したり、彼等は又アニ及びヴァガラチバットの古憲法及び、彼等の名譽と司配の回復を吾人に約したり、然るに暴君等は卑怯にも自己の印璽を否認し、而して此等名譽の約束に代ふるに、アニの石碑の頽廢に加へて吾人の學校の頽廢を以てせり、』とこれアルメニア人宣告書の一節なり、其言一に何ぞ痛快悲酸あるや。

經濟問題
を提げて
争はざる
べからず
土耳其
丹

是等の不平は頓てデ・ヨルシア、人を誘ふて、露と離間せんと試みるに至るべく、若しデ・ヨルシア、アルメニア兩國民の合同にして成らんか、それは露に取つて一層由々敷大事なりと雖ども、兩國民間の敵意常に絶えざるが故に、僥倖にも露は一時の安を偷み得るも、其暴威にして益々増長せんか、屈伏者等をして聯合の必要を感せしむる無きを保すべからざるなり。

之を要するに、高加索地方に於ける露の地位は、決して安泰にあらざると雖ども、此等諸邦が結合力に乏しく、且非常に小弱なるは偶然にも露の僥倖なり、又此等諸邦にして厭く迄も國民的大運動の奏効を欲せば、寺院學校等の問題よりも、一層規模の大なる經濟問題(例へば波蘭の如く土地問題)を提げて争はざるべからず。

(5) 土耳其斯丹 土耳其斯丹は天然の疆域外に脱したる露國の領土にして、十數年前までは幾多獨立國の集合なりしが、嘗ては回教的科學の叢淵たりし在昔の繁榮空しく消失して、社會の狀態淺問しき

忠實なる
同盟國た
らしむる
能はず

露の白狼
軍

經濟上の
敗北

許りに敗類し、歴代専制君主の遺物たる東洋風の惡徳と、奴隸賣買の弊害のみ熾んに行はれ、(奴隸市場は露人の爲めに停止せられたるも) 農耕は方法其宜しきを得ず、商業及漁業亦遊牧人種の掠奪の爲めに妨害せられて發達せず、露政府は慄悍なる遊牧人種の侵襲を防禦すと雖ども、高加索地方に於けると同一の失敗を重ね、此等の諸邦をして露の障壁たると同時に、忠實なる同盟國たらしむること能はざりき。

露が此地方を克復したるは、千八百六十五年より千八百八十一年の間にして、斯くて露の白狼軍は(中央亞細亞の露兵は白色の制服を着く) 漸く印度の關門に達し、英吉利人と壁一重の間に接近し來れり。

露は此の如く不可抗の勢を以て、中央亞細亞を蠶食しつゝあるにも拘はらず、經濟上の勝利は必らずしも軍事上の勝利に伴はず、土耳其斯丹に於ける露の貿易は微々として振はず、加之聰慧なる英吉利

商人の競争は、漸くに頭を擡げ來り、露國産物を其市場より驅逐せんとしつゝあり。

終に臨んで附言すべきは、南露地方即ちウクレインに於ける國民的運動これなり、此大運動は千八百六十一年に逝りたる有名の詩人チエヴァツチェンコが、絶倫の天才と哥薩克的熱誠の鼓吹に由りて、一時露政府を驚愕せしめしと雖も、愚昧なる多數人民の冷淡は、空しく彼の靈火を消滅せしめ、遂に大事に至らずして熄みき、又ウクレイン文學社會の代表者たるキーツ大學の講師ドラゴマンノヴ氏も、國民的運動を創めたりしも、これ亦露國政府の心頭を煩はすに至らずして熄みき。

之を要するに露西亞帝國は一國家としては餘りに尨大に失し、且其國民的結合中心に鞏固にして邊境に薄弱、否な往々皆無なるか故に敵國が其弱点を捉ふるに便なるの患あれども、露西亞の態は未だ這般の危機に瀕せざるなり。

第三 「スラヴ」人種の東移運動

其の二民族

一千年の昔スラヴ人種（即ち真正露西亞人）が、初めて露西亞の西部に來りしとき、茫漠たる曠野の際涯無く東方に向つて擴がれるを發見したり、彼等の前路を妨碍する者は、唯だ少數蠻族の抵抗ありしのみ、殊に彼等の移住をして一層迅速便利ならしめたるは、露國の地理的狀態なりき、露國の地高原の外山岳と稱すべきもの無く、其氣候は寒暖極めて順次にして、南北兩極端の間甚だしき相異無く、随つて全國を通じて大凡同一の産物を生じ、同一の勞働に従事するを得べく、彼等が移轉を企つるも些少の變化の外は、其舊習を改むるの必要無かりき。

此等の便利は、自から露國人の結合を鞏固ならしめたと共に、彼等が東方に向つて進行中、端無くも彼等と反對に西方に向つて進行

せし亞細亞の遊牧人種と衝突を來たし、其争闘九百年の久きに亘りしが爲に、生存競争攻守同盟の必要は、一層彼等の結合力を堅からしめたりき。

此の如くして彼等は烏拉爾山^{ウラル}を越え、西比利亞を横斷して、遂に太平洋岸に達したり。

左に述べんとする「スラヴ」三種族の外、露國の北海岸に住する「ボモル」人種は、元とノヴゴロッド共和國市民より出で、常に北海の危険と寒威に抗するが爲め自から勇氣と獨立心に富み、其間に奴隷無く、^{ウヰ}ヰ^{アカ}アカ人亦ノヴゴロッド市民と芬蘭人の混合人種なり、露國移民の先驅者たる西比利亞人は、歐羅巴露西亞人に比すれば、野蠻なる代りに獨立心に富みて、少しも奴隷を有せず、烏拉爾の坑夫亦謹慎なる勞働者なり。

「スラヴ」の三種族とは、大露西亞人(「ベリコ」露西亞人)小露西亞人(「マロ」露西亞人)白露西亞人(「ビサエロ」露西亞人)これなり、此

中白露西亞人は最古種族にして、大露西亞人は最新種族なりと雖ども、露國の大部分を占領して國民的一致を指導したるは、多く此種の方に於て、其人口亦四千八百万人の多數を占め、次に小露西亞人は其數一千六百万人に近し、然るに白露西亞人は其發達萎靡不振の狀態にして、其數僅かに四百万人あるのみ、此の如き現象は、畢竟彼等が久しく波蘭、リシエニア二國の配下と、貴族制度の壓制に屈伏して、全く抵抗の元氣を消耗したるが爲めならずんは非ず、彼等の詩人は哀吟せり、「吾人の祖先は奴隷なりき、而して世、吾人を目して「サーフ」(隷民の義)と稱す、何人も吾人より見れば主君なり」と、去れば、彼等は内心より奴隷根性に非ずして、自然及び人間に對する詩的戀愛を有すると共に、人間の位階を明かに理解せるは、其歌謠の証する處なり。

願ふに白露西亞人と雖ども、強ち貴族の暴横を憤らざるにあらざるも、多年の慣習は其性と爲り、如何なる屈辱をも之を甘んじ、敢て暴

舉に出ること無きに至りしならん、斯くて彼等は自己の弱点を明知し、人生は害悪多きもの、而して其害悪は到底免るべからざるものなりとの堅き信念を有するに至り、此の如き絶望的信念は又彼等をして、痛苦を受くるも之を感ずると激甚ならざるに至らしめたり、而して彼等が最後の依頼は、天の祐助を乞ふに在り。
次に大露西亞人と小露西亞人は、各自特性に於て大なる相違あり、後者は感に馳せ前者は意に強し、大露西亞人は信念に依りて行動するが故に、何等か實在的感覺を把持する時には、猥りに感情に偏することと云爲せずと雖ども、小露西亞人は此弊に陥り易し、大露人は失望若くは多感の爲めに發憤する時には、小露人の到底思議する能はざる冷酷の舉動に出づることあり、小露西亞人は此の如き在內的健實を欠ぐと雖ども、彼等は一般に詩歌的多感性にして、其歌謠亦形情双ながら優美にして、語調亦整齊せること他に比儔を見ざるはどなり。

小露西亞人は個人の權利及び品位を重んずるの風あるが故に、一般に民權家にして又平等主義なり、之を以て彼等は往々個人主義に偏して、公益を顧みざるの弊あると共に、波蘭の壓制及び貴族制に反抗して、革命運動を企てしことありき、之に反して大露西亞人は社會的結合に富み、社會を離れては人生ありと思はず、社會は愛すべき者なり、予は社會を離るゝを欲せず、死と雖ども一緒ならば亦美ならずや、一は彼等の心情を道破せり、去れば公安或は民意等の思想は、深く大露西亞人の胸底に染潤して、義務てふ觀念を感ずること極めて緊切に、社會に背反することは宥恕すべからざる一種の大罪なりとせらる、小露西亞人は先づ個人の權利の存在を確認して、後公共の安寧なる思想に及ぶも、大露西亞人は個人の權利なる思想は、畢竟公共の安寧に基くものなりと思惟す、故に大露西亞人は調鍊的人種にして、最も統御に適す。
温良にして容易に發怒せざるは、一般露西亞人の特性なりと雖ども

最も此特性に富みたるは白露西亞人にして、大、小露人亦極めて順良決して争鬪を好まず、彼等が凡ての罪人を以て『憐むべき薄倖者』と稱するを見ても、如何に同情慈善の念に富めるかを知るに難からず而して小露西亞人は全く氣力に缺如たらざるも、其弊は餘りに慎重に過ぎ、沈思反省忽ちに頓悟して不活潑に終るにあり、又彼等は事物を大成せしむるには餘りに懈怠にして、着手すれば直ちに成就せんことを急ぐが故に、未來を推測して之が準備を施し、事物の秩序を追ふことなし、『遊伎を演ずるよりも寧ろ骨牌を弄べ、』彼等の爲す所凡て此類なり。

大露西亞人は之に反して實際的材幹に富み、能く可能事、不可能事を區別し、事物を創起するにも順序を追ひ、豫め測算して後之に着手す、彼等は素より狡猾の質を具ふと雖ども巧みに善人の假面を被りて、之を小露人が實性磊落中心黒点無きに、往々狡猾の風を装ふに比すれば、全く正反對の性質なり。

有名なる露國歴史家コストマロヴ氏曰く、『大露西亞人の歌は謠意思の力の最も崇高且つ詩的性質を帯べるものなり、大露西亞人の最良なる歌謠は、即ち勢力を集注したる精魂の活動を語るものにして、以て彼等が勝利の徴証と爲すべく、又以て失敗すと雖ども決して内心挫折せざる徴証とも見るべし、』と大露西亞人の面目風采、紙上に躍如たるにあらざるや。

「スラヴ」の三種族殊に大、小露西亞人の特性は、此の如く相違すと雖ども、之を以て直ちに兩種族間に反目疾視と速了すべからず、現に南部露西亞に於ては、兩種族の雜居せる廣大の地方ありと雖ども未だ會つて其間に何等の衝突を起したることなく、兩種族は極めて完全に混和し、風俗、習慣、言語等亦自ら一様ならんとするの傾向あり。大、小、自三露人種間言語の相違ありとするも、決して各自の了解を難からしむる迄に甚だしからず、各自それらの音響、語調、俗語等を有するが故に、相互に迅速なる會話を遂ぐる能はざるは勿論なり。

第四 哥薩克兵

勇敢なる
武士

哥薩克兵
の濫觴

自然の障
壁

コサックス
 哥薩克兵は元と純然たる一人種一國民に非ずして「スラヴ」韃靼、波
 蘭等諸種族の混合より成り、而して「哥薩克」とは韃靼語にて、「勇敢
 なる武士」と云義なり。

三百年以前、露西亞の各民族と韃靼の遊牧人種との間に、激烈なる
 生存競争行はれし時に當りて、露政府は邊疆の住民をて、韃靼族の
 侵入を防禦せしめたりき、これ即ち哥薩克兵の濫觴にして、爾後人種
 の移住運動と共に不羈獨立なる流氓の大群之に加はり、又露國人民
 にして露政府及び波蘭貴族の壓虐に堪へざる者、亦自から之に合し
 韃靼族の己に領有せし國土に向つて、勇往突進したりき、去れば露
 國政府は彼等を以て自然の障壁に利用して、常に遊牧人種との戦争
 に於ける先鋒と爲し、因て以て漸次に其版圖を擴張したりき。

哥薩克兵の勇猛豪膽にして侵畧に長じたる、實に驚くべきものあり、

哥薩克兵
の職務

土耳其政府の威勢未だ赫々として歐洲を風靡し、莫斯科政府も其下
 風に屈せし時に當り、彼等は其屬地たるドン河岸を掠奪するを躊躇
 せざりき、即ち歴史上有名なるアツツの包圍攻撃は、彼等の勇猛と
 大胆とを証して餘りあり。

彼等の別派たるテレック及びイエロクイェロクの哥薩克兵は、遙かに亞細亞
 の中央に突進し、蠢野なる山民の中に雜居して之と競争し、又有名
 なる哥薩克の大將軍アマタアイエルマク、テモフエヴエヴチは遂に烏拉爾
 山を跋渉し大に進んで西比利亞を征服せり。

現今哥薩克兵は男女合計二百三十万余人にして十箇所に分れて各自
 兵役に従事す、中に露政府の命に因りて組織せしものと、私に成立
 せしものとあり、哥薩克兵の職務は武術にして其の兵役に服せざる
 間は、農工商夫れくの業に従事す、其体軀は精悍長大にして、恰
 かも鋼鉄を以て堅めたるが如く、膂力亦倫に絶せり。

哥薩克兵は露政府の力を假らずして邦土を征略し、而して漸次に之

を拓殖して之を露政府に貢献し身本國と數千里を隔つるも、尙は露皇の臣民を以て任じ、櫛風沐雨の艱難を辞せずして、一向忠勤を勵みつゝあり、然れどもこれ彼等の唯一最終の目的に非ず、彼等は露政府の利益を圖ると同時に、又戦利品、名譽、殊に獨立不羈の生活を欲望するが爲に活動せるなり。

露政府の冷酷なる、哥薩克兵に依りて益するところ大なるに係はらず、一朝危急に瀕しては彼等を敵手に放棄して省みざる、例へば露土關係の時の如き場合あり、加之露皇の專制政治と其代官等の暴横は獨立と自由を愛する彼等の最も疾惡する處にして、此等の情勢は漸くに露政府に對する同情の念を冷かならしめ、彼等は屢ば本國の國難に乗じて其政府を轉覆せんと企てしことあり、又叛徒に内應せしことありき、而して又ビーター大帝の時世には其自由を束縛せらるゝを厭ひて、土耳其に移住せし種族もありし程なりき。

哥薩克兵内部の組織は一個の大なる自治團體にして、萬事は「クロ

ウグス」なる村落兼軍隊會議に依りて議決し、官吏は皆公撰にして産業を治むるにも、全社會共同して之に當る、其秩序實に整然たるものなり。

哥薩克兵の漸く膨脹發達するや、露政府は亦もや不法なる干涉政策を執り、あらゆる手段を以て之に干涉を試み漸次に彼等が從來の自治權を剝奪して、或時は軍隊を更革し、又或時は之を壓制壞滅し、此の如くして哥薩克的特色を滅殺して強ひて露國臣民と同化せしめんとせり。

此目的を達せんが爲めに、露政府は哥薩克の大將軍には露國皇子を以て之に任せしめ、其偏將には露國士官を以て之に充て、又從來共有財産なりし哥薩克の領土を不公平に分配し、或は官吏のみに爵位を授與して彼等の間を不和ならしむる等、種々の方策を施しつゝあり。

然るに露政府の政策は着々奏効して、此の如き不平等の結果は、彼

等の間、反目疾視の状を生じ、最早哥薩克兵は露政府に對して一致の抵抗を試むること能はず、又其特權は痛く削減せられて露國本土の農民にすら及ばずなり、遂に哥薩克的自主自由の風は、蕩然として地を拂はんとするに至れり。

第五 露國に於ける日耳曼人と猶太人

露國に於ける猶太人と日耳曼人は、其社會的地位自から他の非スラヴ人種と異なるものあり。而して其相異なるや二民族全く反對にして、前者は凡ての帝國臣民に屬する最も普通の特權をすら享受する能はざるに反し、後者は眞正露國人の有せざる凡ての特權を享受して、傲然社會の最上位を占む、一言すれば日耳曼人は恰も露國に於ける治外法權の臣民にして、猶太人は穢多非人の如し。

日耳曼人が此の如き權力を露帝に占むるに至りしは要するに彼等が露國文明の恩人なりと云ふの故を以てなり、已に前章に述べたる如

く巴爾的地方の日耳曼人は、往々歐洲文明の露に流入するを妨害せしと雖ども、又彼等が自身に施用せし制度文物は實際好摸範に非りしと雖ども、當時混沌未開の境に彷徨せし露國に取りては、これ實に暗中の光明たらずんばあらざりき、又他の地方に住せし六十萬以上の日耳曼人中には、誠實懇切に此新興國を指導せしもの多かりき、南部露西亞に於ける日耳曼人の植民地は、露政府よりあらゆる特權と自由を許容せられ、且彼等の勤勉力耕に依りて土地豊饒となり、隨つて甚しく其生産力を増加しつゝあり、此の如き經濟的發達が露國の産業界に及ぼせし効果は、露人の大に徳とする所なり、中に日耳曼人にして莫大の土地を占有するを以て、露人の疾視するところとなる者多きも、未だ日耳曼人問題を興起するに至らざるなり。

猶太人の過半は露國に住し、其數波蘭の分を算入する時は三百萬人に達す、彼等が露西亞に來住せしは極めて古しと雖も、其多數の移植せしは實に西歐に於ける猶太人迫害の時なりとす、時恰かも彼等の

猶太人の
金銭崇拜の
性は政策の
罪なり

移住せし現今露の西部は、波蘭の領地なりしかば、波蘭諸王は他の歐洲中世紀君主等の故智に倣ひ、猶太人を以て金銭を収益するの器械に使用したりき、教育ある某猶太人は其同胞が金銭崇拜の惡弊に染潤せしは、重に此等政策の罪なりと慨歎せり、猶太人は此の如く、波蘭人ウクレイン人の壓虐を受けしが、波蘭が露に割取せらるゝや、露の列皇は一層嚴酷の處置に出で、彼等を放逐して、其時未だ無人の地なりし黒海の沿岸にのみ限りて其の居住するを許したりき、其他の高加索地方及び莫斯科の猶太人も同一の虐待を受け、多くの特權を減削せられ、今日と雖ども猶太人にして官吏となり學校に入るを得る者は、其數に於て制限あり、

猶太人が世界至る所疾惡を受くる所以の者は、畢竟其金銭崇拜の念強きと、宗教的及び國民的狂熱に因りて鼓吹せられし鞏固なる結合力を以て他に當るとに因ると雖ども、未だ露國に於ける猶太人の如く、其熱度甚しきは他に見ざる處なり、彼等は露國人を疾惡すること

猶太人疾
惡せらる
る所以

甚しく、其國に在り乍ら露語を語るもの少なく、又露國人を以て「上帝の撰民」に相當したる道德に適せざる人民なりと輕んじ、又彼等の中多くの土地を有して露國農民に貸付け之を虐遇する有様坐るに沙翁戯曲中のシヤイロックを聯想せしむ。

在露猶太人の職業は他邦に於けると同じく、貿易業、代辦業、仲立業等重に生産者と消費者間の介立者なれども、苟くも有利の業とあれば如何なる卑賤不人情の事をも、固より彼等の辭せざるところなり、而して酒店、鞍物商等は彼等の最も多く從事する商業なりとす、又露政府の強壓に因りて猶太人の住居は小區域内に限られたるが故に彼等の間に生存競争烈しく行はれ、キーヴ等の州に於ては、其二割半は乞食若くは盜賊に墮落せりと云ふ

排「セミチック」問題は他の歐洲諸國に於けると同じく亦露西亞に於ける一大問題なり、猶太人にして從來の頑陋なる結合と賤惡すべき性質併とに省ることなく、露政府亦彼等に負荷したる嚴法酷律を撤す

排「セミ
チック」
問題

露人は社會的結合に富む

るにあらずんば、事態は一層切迫せんとするものあり。

第六 露國の農民社會

(イ)農民社會結合の起原(ロ)多數階級の勢力を主權者(ハ)農民社會の組織と土地分配(ニ)私有財産制(ホ)農民の愚昧政治の不進歩(ヘ)農民の精神的革新

(イ)農民社會結合の起原 人は元と社會的動物にして、常に同族と結合せんことを欲す、既に述べたる如く、露國人殊に大露西亞人は極めて社會的結合に富みしと雖も、其歴史的事情及び彼等が周圍の地理的狀態は、一層其性を發揮せしめしものありき。

露西亞は十三世紀の頃より、一方には韃靼人に侵襲せられ、他方には日耳曼人の爲めに交通を遮断せられたりしを以て、商工業は恰も滋養欠乏の狀態に沈淪せしのみならず、農業者亦其土地を制限せられたるが故に、領土的貴族制の發達を妨げしと共に、各自の間に平等なる感覺を催さしめ、外寇との争闘は自から相互の結合力を

二世紀以前の露國村落

鞏固ならしめたり。

又試に二世紀以前の、シムハリスク近邊なる露國村落の狀態を想像せよ前面には荒漠たる原野連なり、他の三面には鬱蒼たる密林相接し、蠻族及び猛獸時に出没して行人を惱ます、嚴冬に至れば氣候互寒、朔風凜冽全村殆ど氷結せんとす、又一朝事ある時、其最後の隱匿所たる領主の城門に行くにも、無徑の沼澤を通過せざるべからず、此等の地理的狀態は自から他の救護協力を要し、益々相互の結合力を鞏固ならしめたり。

以上の如き社會的結合の必要は、社會の各人をして充分依頼するに足るべき完全なる社會組織を想像せしめ、随つて自治の風を誘ひしと共に、人民各々完全なる自由、平等の權利を有するに至り、遂に經濟的關係に於ても各自平等なる思想を抱くに至れり、『各人は平等なり、社會の制度は唯だ社會の利益を基とすべし、而して社會は各個人の勞働を保障すべき義務あり』と此の如き思想は露國人の間に自

各人は平等なり

から發生せし社會發達の順路なりき、去れば未開の土地は村落の共有財産にして、已に開拓したる土地は各家族の所有に歸したりしも、彼等の社會的結合力は自から土地をして、自治團體の共有財産たらしむるに至れり。

(ロ) 多數階級の勢力と主權者 露國の多數階級なる農民は此の如く鞏固なる自治制度を組織して、自由と平等とは彼等の二大表幟なりしかば、其勢力強大にして、一時は貴族の發達も市民の權力も之が爲めに妨礙せられたりと雖ども、遂に一方に於て恐るべき專制主義を發生し、人民の利害と反對なる政治を施行せしむるに至りたるは、畢竟多數階級勢力の反動に非るなきを得んや。

露國農民の勢力は專制主義の勃興と共に一大頓挫を來したりしと雖ども、其社會に伏在する鬱勃たる勢力は、不知不識の間にも一國の大勢を指導しつゝあるなり、否な此の如きの間にも多數人民の政治的精神は益々發達して、彼等が言はんと欲する所を言ふの日は蓋し遠

多數階級
勢力の反動

きにあらざるべし、之を再言すれば彼等は遂に嘗て其社會に試みし政治的畫策を、一國に施さずんば已まざるべきなり。

言ふ迄もなく專制政治と之に伴ふ隸民制は、痛く露國農民が民主的思想の發達を妨礙し、人間品位の觀念は自から遲鈍となり、爲めに多少性情の變化を來したりしと雖ども、彼等は決して純然たる奴隸の境界に墮落せざりき、蓋し農民等は隸民制を以て一大彼岸に到着する過渡的制度なりと信じたりしなり、而して 領主と雖ども、法律に因りて農民を虐待することを禁せられたりき。

露國農民は此の如く專制政治の桎梏に苦みしが故に、其結果として益々各自をして緊密に社會と結合するに至れり、即ち其社會は彼等が人間としての權義を承認せられ、各自愉快に交遊し得る唯一の場所にして、道徳上よりも物質上よりも、將又他の虐待に接する時其保護を要むるにも、此處を除きては他に依頼の道無かりしなり、斯くて彼等は其社會を愛着すること甚しく、彼等の中より幾多の佐倉宗吾

人間を認めし
唯一の場所

若くはハムプデンを生じたりき。

(ハ)農民社會の組織と土地分配 農民社會(Peasant Socy)とは自治權及び土地所有權を單位として結合せられたる自治團體にして、一村落を以て一社會となすものと、數箇の社會より成る大村落とあり、又往々數箇の村落合併して一農民社會を成すものあり、斯くて一社會の戸數は二十戸若くは三十戸より、數千戸に至る大小不同あり。

而して此等農民社會は一段小なる社會より成る、之を組合(Osmak)と稱す、各組合は即ち又一個人より成り、各農民社會に起すべき事業若くは分配すべき財産ある時は、社會は各組合より代表者を召集す、而して組合員(個人)は其代表に酬るが爲に、金錢若くは耕耘に助力することあり。

各村共に一役場あり、公撰の村長之を代表すと雖ども、其職權は社會の決議を施行するに過ぎずして、土地分割、新税賦課、共有財産

處分等の大問題及び重要な法例制定は必らず村會審判、決議を経ざるべからず、村會は屢ば開かれ(婦人と雖ども夫を代表して出席す)農民は盡く之に出席し、時々的重要事件村費の出入等を討議し、若くは行政の監督を主務と爲せども、時には格段の問題に就かすして専はら或る抽象的主義原則を討究することあり、又土地總分割の時には、其討議一年若くは二年に亘るも尙ほ決せざることあり、其議決は強ち多數決に依らずして、要するに多數を満足せしむるにあり。

村會は極めて活氣を帯び、又極めて不羈獨立にして、中央政廳の干渉あるにも拘はらず、之に僻易することなし、去れば中央の官吏にして村會の決議を翻さんとするには、極めて非常手段に出で詭詐奸策を廻らして撰擧に干渉すること、又不時に村會を召集して、反對派に之を通知せざることあり、而して農民も此の如き不法の行動に對しては激しく反抗して其獨立を全ふせんが爲めに、毅然中央官吏

の命令を拒むことあり。

土地分配は勿論農民が最も利害を感ずる最大問題なり、其分配の方法たるや極めて公平にして、一村の全土地を預じめ地質に随ひて上中下の三等に区分し、各組合は此の三等の地を夫れ／＼均分して更に之を各組合員に小分す、若し最初の分配にして地質に由りてのみ均分し得ざる時には、高を多くして質の不足を補ふことあり、又社會は一個人が其土地を改良したりし迎之に報償せずと雖も、而も耕耘を怠りたる者には肥料を施さしめ、或は罰金を附加する事あり。

大露西亞の農民社會は、土地の外に湖水の魚族、水車、牧場等の共有財産を有し、又食料若くは種子として一般農民に穀物を囑ぐ公設賣店さへあり、而して此等利福の分配は極めて公平、均一にして、一旦均分せられたるものも五六年を経過して、各組合員家族の増減等の爲め自から公平を失するに至るが故に、更に分配を行ひて之を均

衡ならしむ。

從來毎年の如く行ひ來りし土地分配も、千八百六十一年以降之が分配を行はざること十三年若くは或る地方にては十五六年の久しきに及びたり、斯く不公平を忍んで土地の分配を行はざりし所以の者は農民等が大に財産調査を施して租税の負担を公平ならしめんと欲せしが爲めなりき、これ畢竟租税の負担を公平ならしむるに非れば如何に土地を均分するも、決して全体の公平を得ざればなりき、此の如く農民の熱望にも係はらず、露國政府は頑として此等の要求に應ずべくもあらず、是に於てか農民も遂に一旦は節を折り、再び諸方に土地分配を行ふに至りしも、鬱勃たる活火は遂に他日大に發して、焔々天を蔽ふに至らずんば已まざるべし。

(二)私有財産制 農民社會の共有財産制の外に尙ほ幾多の私有財産を有せし者ありしなり、蓋し露國農民が土地分配法を施行するに至りしは、近古の事にして、斯の如き時代に到達する以前に、屢

次社會制の變遷を經過したりしは、社會發達の順序に於て疑ふべからざる自然の順序なり、去れば露國は最初に閥族制クラン制を経て、漸次に家族社會制ファミリー・システム、分家社會制ステム・システムに及び、遂に土地均分制エーレン・システムに及びしは幾多歴史家の保証する處なり、此等家族社會制、分家社會制等の殘遺物として、數多の公子、貴族、豪農等を生ずるに至りしなり、此等の私有財産を有する者は、其土地を耕作するに或は奴隸を使役するものあり、或は賃金を拂ふて農夫を雇傭する者あり、又或は之を農民に貸付けて年貢を徴する者あり、斯くて此等私有財産の膨脹増加と共に分配の土地随つて減少し、富者は富の力を以て貧者を壓せんとし、貧者は多數の勢を以て之に抵抗し、其勢滔々として當るべからず、遂に有土少數者に逼りて土地の分配を促し、私有財産は爲めに多くの減削を蒙り、共有財産随つて増加するに至りしなり。露國に於ける分家社會制の進化は、一方に於ては純粹單獨なる私有財産制の發達を促がし、他方に於ては農民社會の共有財産制の結果

を生じたりしと同時に、莫斯科政府は所謂官農スタット・ベゼントなる者を有したりしなり、露國の諸皇は其軍兵に邊境を防護するの條件を以て彼等を其近傍の領土に植民せしめたり、これ即ち官農の起原にして、爾後政府は法律を以て一の集合財産と爲さんと企て、或は單の借地人と見做せしにも拘はらず、其子孫等は古勇士の未裔なる「木靴の紳士」と呼ばるゝを以てこよなき名譽と信じ、其耕地を以て自己の私有財産と爲し、隸民を使役するの權利を有するのみならず、彼等自身は嘗て隸民の境遇に墮落せざりしなり。概して言へば今日迄家族社會制の存在せる地方は、白露西亞及ウクレインの哥薩克兵等の如き、農民社會制を行はざる地方にして、土地均分制の下には大家族の生存を見ること極めて稀れなり、これ即ち官農の中に屢ば大家族の發生する所以にして、現に一家族内に三四代に亘る同族共住し、孫を有する人にして白髮の家長より兒童視せらるゝが如き奇態の現象あるは、露國統計家の語る處なり。

凡ての土
地は國有
なり

普通農にして、一人前の耕地四、五「デシエーテキン」を農民社會より給與せられざる時は、政府に請願して農民となるを得たりき。露西亞に於ける土地所有權の所在は何處なるか、これ久しく決せられざりし疑問なりき、開國草創の際各自法律思想なる者極めて曖昧模糊にして、諸侯も貴族も大地主も農民も土地を所持せし者は、皆之を讓渡し之を貸付け若くは之を賣買することを得たりき、而も何れも嚴密なる意味にての不動産にはあらずして所謂土地を占有したりしなり、然るに貴族制と獨裁君主制の爭端は、漸くに農民共產制の發達に刺激を與へ、此刺激は引ひて農民をして、凡ての土地は獨り露國皇帝に屬すべきものなりとの原理を信仰せしむるに至らしめたり、換言すれば凡ての土地は國家の領有なりと一定したりしなり、此の如く一定せらるゝと共に、露皇等は何時迄も此原理を遵守せずして、嘗ては由つて以て貴族制と戦ひし武器を以て、こたびは其恩人たる一般農民に臨み、國家の領有たる土地を私して「ボミイストチク

ス」なる新貴族に分與し、農民をして之を耕作せしめたりしなり、之に於てか農民は勢ひ平かなる能はず、連りに政府に逼りて土地の分割及平均を要求し、或は其同儕にして多くの耕地を有する者には、之を貧民に分配せんことを懇請しつゝあるなり、之を要するに露國列皇の政略は、一旦土地所有權を禁止して、更に之を再興したりしなり、語を換へて之を言へば、共產制度の發達を促せし後掌を返すが如く農民をして、再び蘇生したる貴族等專權の下に放棄したりしなり。

此の如くして露皇は農民をして官農に近接せしむると同時に、官農の中にも土地均分法若くは共有財産制を促がし、以て普通農民の列に加へんとしつゝあるなり、而して露國農民の共有財産に屬するもの地方に於て異れりと雖ども、大凡全土の八割若くは九割を昇降せり。

(ホ)農民の蒙昧——政治の不進歩 既に述べたる如く、露國の農

專制政治
を脱し得
ざる所以

文化の停
滯不振を
人民の無
智迷信

民は自由と平等の心醉者にして、又た極めて團結力に強き人民なれば、讀者は直ちに彼等が政治上の地位は、英吉利若くは瑞西國民の政治的狀態と同一となるべしと想像すべきも、少しく露國農民の精神的狀態を窺はば、這般想像の甚しく誤れるを發見するなるべし、否な此の如く自由と平等を愛し此の如く團結力に富みたる人民にして、今尙世にも恐ろしき專制政治の桎梏より脱却する能はざるとは、到底讀者の想像だも能はざる所なるべし。

然らば則ち、其間に何等かの理由なからざるべからず。

彼等が此の如く憐むべき狀態に沈淪せる所以の者は、職として其文化の停滯不振なるが故に、一般に朦昧無智にして又極めて迷信に富めるに歸せずんばならず、之を譬ふれば、露國人民は井中の蛙なり、彼等は嘗て其狹隘なる農民社會以外の天地を見しこと無きなり、去れば少しく複雑したる政治若くは經濟問題興起するとも、开は到底彼等判斷の及ばざるところ、露後の嬖臣が露後に説いて從來自由獨

立なりし人民を、一萬人隸民として召集せりと云ふ、又政府は此度一百万「ルーブル」の公債を募集したりと云ふ、开は何の爲めなるや又如何にして然りしや、空々漠々一切之を了解せず、既に之を了解せず争でか政府の處置を攻撃し、若くは之を制折することを得べけんや、普通一般の問題に對して尙ほ此の如し、少しく高尚なる政治問題に逢着して、彼等が我が事に非るかの如く、雲煙過眼視する固より其處なり、此の如き彼等の狀態は、其知識の淺薄なるが故に非ず、全く無知蒙昧なるが爲めなり。

數百年の久しき彼等は全く文明國民との交通を遮斷せられたり、否な彼等よりも一層蒙昧野蠻なる人民と觸着したりしなり、去れば現今と雖ども、偶像若くは木石を禮拜する人民多くして、科學的知識等は絶えて之を有せざれば、あらゆる天地の顯象を判斷するにも、極めて狹猛なる經驗、觀察に由るの外なし、即ち彼等が經驗觀察するの場所は、其田園なり、森林なり、其社會なり、他に之れ有ること

人亦漸く
に小さく
なる

他世界は
露國內に
在り

なし、斯く針孔の如き狭窄なる空隙より、廣大にして變幻測るべからざる天地の大活動を觀察せんとす、抑も難ひ哉。試に彼等が觀察力と、迷信の如何なるかを示さん乎。彼等は嘗て巨^{ジャイアント}大の存在を信じき、然るに彼等は今日巨人なきを云ふ、何故に無之かと問へば『世界は日々衰頽しつゝあり、故に人亦漸くに小くなり行くなり』と彼等は又今日尙ほ神人^{アスロギョルツフス}同形説を信ぜり、白露西亞の歌謠中神の家に於ける酒宴の状況を歌ひ『神は手づから甘泉を製し「エリス」てふ豫言者は麥酒を醸造せり』とあり、又甚だしきは他世界は露西亞國內に在り、而して現に他世界に旅行せし或人は嘗て死去せし友人に彼處に邂逅せし談話を眞面目に信ずる人多し、又現今と雖ども、露國の村落に於て魔術師の存在を否認せば不測の危禍を買ふことあるべし、此の如きは唯に農民間のみならず、宗教社會にても魔術師に類したる行動禮式を演じて愚民の信仰を誘ふのみならず、彼等自身も中心より之を信ずるもの多し。

一般農民の知識的狀態此の如し、苟くも文化の程度に應じて政治を施すべきものなりとせば、露國農民が專制政治の憐むべき桎梏を脱し得ざるを以て、一概に罪を露國政府のみに歸すべからざるものあり。

(へ)農民の精神的革新 斯く多年の間沈醉に陥りたる農民の精神的發達は十七世紀の末葉に於ける波蘭及び瑞典との國民的戰爭に由りて、端なくも覺醒し來れり、勵精西歐文明を輸入せしヒーター大帝の偉業を翼賛せし有識者中には、多數農民の勢力も加はりたりしなり、堤坊は已に破壊せられたり 西歐の文化は滔々として侵入し、一國を揚げて巨濤の中に漂はさずんば已まず、第一に革新の先鞭を着けしは、實に宗教界に於ける家長的特異の虚禮を廢して、希臘教會の禮拜式と一致せしむべしと云ふ分離運動なりき、これ即ち上級僧侶の專權に對する多數人民の一大抗議なりき、次に農民の精神的革命に取つて、最も大なる効果を與へしは、ニコラス一世の隸民制

革新の先
鞭

七割六分
以上の人
民は目に
一丁字な
し

廢止の勅詔なりき、最初の程は西歐文化の利福を享受せしものは、貴族僧侶の如き少數の特權ある階級にのみ限られ、一般農民に及ぼせし影響は極めて少なかりしも、此勅詔の發布と共に、此等の有識社會は漸くに農民と接近し來り、學校に書籍に若くは直接の交際に因りて、人民に感化を及ぼせし者實に大なりき、然るに非革新派の反動と共にドミトリ、トルストイ伯文部大臣となり、革新運動は爲めに一大頓挫を來したりき、或人がトルストイ伯を冷評せし如く、彼は實に『衆愚大臣』にてありき、即ち彼は全力を傾注して小學校の設立を妨げ、多數人民に智識を擴布せざらんが爲に、あらゆる妨害を試みたりき、露政府亦同一政策を採り、彼の大國を以てして小學校教育費に充つるは、僅に三百萬「ルーブル」の少額に過ぎざりき、而して其効果遂に空じからず、千八百八十二年に於て露國人民の殆んど七割六分以上は、眼に一丁字なき蒙昧者なりき。

然れども元來蒙昧は其先天的性質に非ざる露國人民は、あらゆる方

法に依りて新知識を得んと試み、現に千八百八十年の頃聖彼得堡及附近の大工に向ひて爲されたる公會講演には、傍聽者五万人に超えたりと云ふ、以て彼等が如何に智識に渴望しつゝあるかを知るに足るべし。

其他露國の農民は、近來其農耕の閑暇を量りて一体を組み、黒海及びアツウ海の諸港に船舶の陸場、及び南部露西亞地方に鐵道業及び牧畜業労働の爲め出稼する者多し、此等出稼人は其旅行に依りて、新たに得たる見聞、經驗を其郷里に傳播し、自から文化の進歩を裨補するが爲めに、農民の思想習慣等に甚しき變動を生じ、隨つて從來の家長的專制に對して、激烈なる反抗を來すに至りき、此等の家族的革命は臆て又家族の結合を薄弱ならしめ、爲めに幾多の新家族を生ずるに至れり。

嗚呼露國農民は遂に支那人若くは印度人を以て満足せざるべきなり。

第七 露國の上流社會

(1)帝權の伸張(2)其藩屏(3)僧侶(4)貴族(5)部民

(1)帝權の伸張と其藩屏 韃靼人種の侵入に由りて、在昔の露西亞は根底より支離解体して殆んど其舊態を止めず、漸く發生せんとせし封建貴族及び商業社會亦、爲めに其萌芽を剪斷せられたる由は吾人已に之を言へり、然るに國家は固より蠻族の蹂躪に委すべからず、是に於てか露國人民(重に農民)は大に國民的結合の必要を感ずると共に莫斯科公子等を擁護して蠻族を掃蕩するの最も國家の統一獨立に利あるを見たりき、恰かも莫斯科は兩人種爭衡の巷にして、全國の憂國志士及び經世家は盡く此處に集まり、あらゆる計畧智術を以て蠻族を退却すると同時に人民疾惡の集点たりし貴族制を撲滅し以て露國の統一と獨立を全からしめたりき、これ抑も露國皇帝が絶大無限の權力を得るに至りし起原なりき。

露皇專權の起原

露皇一人の利害一致せず

人民は斯の如く莫斯科皇帝と共同の利害を感せしに係はらず露皇の利害は必ずしも人民のと一致せざりしなり、露皇は元と他の貴族と同じく一個の大地主に過ぎざれば、彼が第一に感ずるは自己及び家族の利害にして、次は其財産に對する利害なりき、莫斯科皇室の勃興に恰も露國が一大農民國たらんとせし際なりしかば、自から皇室と人民の利害一致せし處ありしも、一方に於ては露政府と人民の關係甚だ薄弱にして漸くに國家の主權と多數人民の不可避發達との間に一大溝渠を生ずるに至りき。

然るに露皇は能く此溝渠を豫知せしも、人民は絶えて之を知了せざりき彼等は徒らに其間の生存競争に復はしく、政府の行動に關しては眞真相を洞見する能はず、從來己れにつらかりし貴族等を疾惡するの反動として只管に皇帝に依頼し皇帝を以て平等自由の一大保護者と妄信するものから何等の制限監督をも加へずして、彼の爲すが儘に一任したりき、是に於てか幾多のシーサーは其の嘗て己を奉戴

せし人民を奴隷の境界に擠さんとしき、而して遂に一人のブルタスは生かせざりき。

是に於てか露皇は萬事其意の如く行はれざる無く、又行はざること無く甚しきに至りては人民は自身の利害と衝突するをも知らず、極力露皇を従憑して何事をも其意の如く斷行せしめたりき、若し露皇の意に反するものありとせば、唯だ貴族等に對して其主權を緩恕すべからずと云ふの一事なりき、此の如く人民は露皇をして貴族等を壓制せしめしが爲めに、彼等をして英國貴族が虐主ジョン王に大憲章を逼取せしが如く、露皇の專權暴虐を牽制するに由なからしめ、徒らに彼をして其非政を逞くせしむるの俑を作り果ては自身の刃を以て自身を誅めるの悔を見るに至りしなり。

露皇は人民が今こそ貴族を抑壓するの念に急なるが爲めに彼等自身を殺さつゝあるを覺らざるも、何時かは到着せざるべからざる自然の順路に復歸して一大反抗を來すべきを豫察し、之を防禦するの手

段として慧くもこれには貴族等特權ある級階を利用して其藩屏となし以て帝權を保翼せしめ、壓く迄も自己の立脚地を鞏くして人民に臨み壓制を逞ふしたりき、露皇が敵を以て敵を撃つ政策貴族をして漸く皇室に依頼せしむると同時に、貴族等は皇帝の權力を假りて漸く熾んならんとする人民の政府反抗を壓制したりき、一たび人民に歸したりし政府の威信は今や貴族等に歸して、彼等は漸くに昔時の權勢を恢復し來り皇室との關係は日に増親密ならんとするに反して、人民は空しく皇帝の欺くところとなりき、請ふ吾人をして少しく貴族等の状態を語らしめよ。

(2) 僧侶

露國の宗教は現今淺間敷までに墮落しつゝあり、露西

亞教會の首長は皇帝自身にして、其勢力は政府の任命したる監督長より成れる宗教會議に在るも事毎に政府の鼻息を窺はざるべからざるが故に絶えて精神的獨立なるものなく、一言すれば宗教會議は政府の奴隷に過ぎざるなり。

嚴肅なる
惡罵

白僧と黒
僧

宗教會議は何等の政權を有せざるは必ずしも不可ならず、而も彼等が政府の願使に甘んじ緇衣沙門の身を以て、或時は警官の手足となり、或時は最も愧づべき間諜の職務を行ふに至りては、實に咄々怪事と云はざるべからず、即ち人民が政府に對して不穩の舉動ある時若くは社會黨及び土地問題の沸騰する時には僧侶は之に對して所謂「嚴肅なる惡罵」を試みざるべからず、又或は囚徒の白狀に由りて思ひ當りたることを、警官に報告するの義務を負へり、露西亞教會が此の如き汚行敗徳をも忍はざるべからざるに至りしは抑も所以あり。

露西亞教會の僧侶に二種あり、黒ブラッククラウザー僧(正僧)白ホワイトクラウザー僧(俗僧)これなり、黒僧は露國の唯一正當なる直隸僧侶なるも白僧は凡て宗教上卑賤の業に就き、必ず家族を有するが故に自から俗社會と近接す、然るに宗教界の財權は一切高尚なる教務を管理する黒僧の手に歸し、監督長も彼等の中より出づるが故に、此等教界の貴族制は、彼等をして自ら國王若くは羅馬法王の如き地位に昇らしむるに引き替

金銀を得
る迄は葬
式の中止

へ、白僧は全く此下に隸屬する從僕の如く、且つ普通人民より得る喜捨金少きが故に、其管轄區管轄區より得る少額の金を以て一家を支持せざるべからず、此の如きの生活の困難は、白僧をして種々の罪惡汚行を遂げしめ、錢を掌握するまでは葬式を中止して死人を腐敗せしむべしと劫迫する者或は要求額を與へざりし連村人の饑饉疫病を祈禱せし僧侶すら出したり、去れば僧侶に對する人民の信用は殆んど地を拂ひ、遂に改宗分派頻々として相接し、僧侶は警官の手を假りて之を拒がんと思はれども、滔々たる額波は之を排するに由なく、現今一千五百万人の分離者を見るに至れりと云ふ。

輒近に至りて、政府は僧侶を教育して其地位を改良せんと企てしかば爲めに宗教界の一新時期を畫して、従前よりは有識の僧侶を出だせしも而も其教育の方法宜きを得ざりしが爲めに、新僧侶の多くは神ゴッドの存在を信せざる懷疑派に陥り、露國の道徳は爲めに一層の敗類に赴きたり、否な彼等の中には恐るべき虛無黨の群に投ずる者すら

病已に符
盲に入れ

主司殿

生ずるに至りき、^{アレキサンダー}亞歷山三世は改革黨を鎮壓せんが爲め僧侶の力を
假りし報酬として僧侶の後援と爲りて人民を壓制したりき、然れど
も露國宗教の病毒は既に其膏旨に入れり、今にして一大革新を施さ
ずんば、遂に其生存すら覺束無きに至らんとす。

(3) 貴族 露國現今の所謂貴族なる者は盡く舊公家の末裔に非ず中
に現皇統よりも高貴の家門もありと雖ども、其殆んど過半は莫斯科
皇帝の特旨に依りて、貴族の榮爵を授かりし者なり。

蓋し露國貴族の起原は、莫斯科皇帝が金錢及び封土を給して、近衛
に服従せしめし主^{グランド・ドゥーク}殿^{グランド・ドゥーク}司^{グランド・ドゥーク}より出でたり、此等主殿司は重に舊公家
の護衛、若くは諸卿の侍郎等の子孫を以て織組せられしが、後代に
及びては普通人民、哥薩克兵、韃靼人甚だしきは流賊の群よりも採
用せらるゝに至れり、即ち有名なるメンチコフス家の祖先は菓子商
にして、ラソウモヴスキ伯は謠歌者の苗裔なり、彼得大帝の如き
は奴隸の中より官吏を採用せし程なりき、此の如き例は最近に至り

狡才ボリ
ス、ゴド
ノヴ

て亞歷山三世の之を廢せし迄は存続したりき、然るに此等莫斯科皇
室の奉仕者が國家に重きをなせし所以は、畢竟其の多數が軍人若く
ば素封家より成りしが爲めにして、露皇の之に依信するに至りしも、
亦之が爲めならずんばならず。

露皇の依信増加するに隨ひ、貴族は漸く跋扈の端を開き、狡才ボリ
ス、ゴドノヴの如きは君寵を恃みて數多の農民を隸役し、威儀乘輿
帝王に擬するに至れり、此の如く貴族の特權は層一層増加し來り、從
來職責に在る者にのみ賜與せられし封土も、彼得大帝の時全く世襲
財産と變ずるに至れり、彼得又條例を發して貴族の基礎を確立し、封
土を有せざる貴族と雖ども、貴族たる者は永久國家に奉仕すべきも
のとし、其服制及び爵位、官等等を一定せり、是に於てか貴族が國
家に對する地位は、恰かも旭日の勢を以て昇進し、苟くも心を當世
に行んと欲せば、此階級より出るの外無かりき。

十八世紀は露國貴族の全盛時代にして、彼等は實に名譽權力の集点

なりしかば、文武の材幹ある者は皆此社會に列せんとせり、是に於てか老朽頑固の舊貴族は、新貴族の入來を嫉み、門閥を盾としてあらゆる妨害を試み、努めて新分子を排斥せんとせり、然るに政府は技倆の点に於ては、此等舊貴族が到底新來貴族の敵に非ざるを見て、劫迫的に彼等を教育せんと企てしも、頑冥にして濟度し難き舊貴族は、政府の眞意を覺らずして、濫りに之に反對し、又政府が彼等をして自治の方策を採らしめんとすれば、此の如きは煩累なる義務寧ろ貴族の衰頽を來たすべきものなりとし、殊に甚だしきは政府が彼等の地位を堅固ならしめんが爲めに設けし、家産相續法にすら反對して、遂に之を撤回せしめたりき。

然るに帝室の貴族を待つこと益々優渥にして、彼等は其封土及び隸民に對しては絶對的權利を許容せられ、女皇ガザリン二世の時貴族の皇室へ參勤するの制を解き、且地方行政を全く彼等に委棄したりき、加之歴代の皇帝能ふだけ貴族を保護して、依て以て國家即ち皇

室の安泰を圖らんとし、濫りに國帑を靡して之を貴族に分與したりき、ガザリン二世の如きは己を擁立せし嬖臣等に、今日の價額より云へば二億萬「ルーブル」の大金を分與したりしと云ふ、貴族が皇室より受けし保護此の如く至れり盡せるにも係はらず、貴族等の頑愚にして全局の打算に暗さ、皇室の希望をして一場の迷夢たらしめ、國民的發達の自然の天勢は、滔々として當るべからず、遂に貴族の衰運を招かずんば已まざるに至らしめたり。

翻つて貴族と隸民との關係を述べんに、皇室が貴族を優遇するは、これ取りも直さず隸民を一層塗炭の苦境に擠す所以にして、彼等が隸民を待遇する方法は幾度か變遷して、或時は政府の命令に依りて少しく寛恕に出でし事もありしと雖ども、概して暴横壓虐至らざるは無かりき、一例を擧ぐればサルチコフ伯爵夫人は己れの禿頭を蔽はんか爲め、常に假髪を用ひしが、秘密の世間に漏洩せんことを恐れて、寢室内の籠中に隸民たる理髮人を三年間屏幽したりしと云ふ、

又貴族にして隸民の娘を奴隸商人に賣りて暴利を貪りし者ありき、此等の例は實に枚擧に遑わらざるほどなり、貴族暴虐此の如く甚しかりしが故に、隸民の彼等を見る事讐敵も管ならず、領主及び其執事の暗殺は往々にして起り、隸民制廢止後三十余年を経過せる今日尙ほ、隸民等は『貴族が犬と人間とを交換せし』當時を回想して憤慨せざる者無く、貴族に對する農民の暴舉は屢次なれば、貴族の特權を増加して國家の強固を圖らんとせし政府の策畧は、反つて國家を動搖せしむるに過ぎざりき、是に於てか亞歷山二世は、遂に千八百五十六年莫斯科の貴族を召集して、『宜しく下より隸民制の覆滅するを待たんよりは、寧ろ潔く上より法律を以て、之が廢止を斷行するに如かず』と云はしむるに至れり。

斯の如く貴族の衰運を誘ひし最大原因は、露國內に教育の傳播せられしにありき、才學兼備の士續々民間より輩出して政府に仕ふるに至りしと共に、識見ある貴族は頻りに同族の腐敗を憤慨するの極、西歐殊に佛蘭西の文化を輸入して頑愚貴族を薰陶し、以て貴族全体の衰勢を挽回せんと睚めしも、多數貴族の腐敗は到底少量の防腐劑を以て之を救治する能はず、遂にとも倒れの不幸を見るに至りしなり。

有識者をして露國貴族を疾視せしめし原因は、貴族が萬事、頑冥なりし如く、最も貨殖の道に拙劣にして爲めに大に露國産業の發達を妨礙せしめしにありき、而して露國政府が貴族に對する政策を變更するに至りしも、職として此等經濟的見地に由らずんばあらざるなり。

クリミア戦争は露國の弱勢を事實の上に証明したりき、これ畢露國政府が貴族をして、人民の過半を束縛して、自由に勞働せしめざりし經濟上の原因より來らずんばならず、是に於てか露皇は貴族を以て、何時迄も無爲徒食の遊民たらしむの大に國家の不利なるを覺り、一方に於ては貴族從來の政權を剝奪して、生産的資本家たらし

めんど望みしと共に、他方に於ては隸民制廢止を斷行して民間資本家を保護し以て産業の進歩を圖らしめたり。

隸民制の曾て熾なりし時より、貴族は隸民を使役する方法に於て甚だ不經濟なりしが、之が廢止は彼等に對しては容易ならざる打撃にして、貴族中漸く家産の衰頽を來す者多く、隨つて貴族の數は減少して、千八百五十八年は世襲貴族の數六十万九千九百七十三人なりしが、千八百七十年には五十四万四千八百八十八人に減少するに至り、從來名譽權勢の職掌と云へば、盡く彼等の專有物なりしが、廢止後は彼等思ひくの職業に轉じ、財産ある者は科學、文學、美術、官吏の職に就けるも、零落せる貴族は銀行、商店、鐵道業等に雇使せらるゝ者あり、又多少の見識を具へ、貴族從來の非行を懺悔せし貴族は、自から進んで從來の特權を返上し、其舊領地に歸耕して其地方農民と伍し、彼等に強力なる援助を與へ、卒先して自由民權の發達を唱へ地方自治政の進歩を圖りつゝあり、其極端なる者に

至りては革命の煽動者となり、社會黨に加はる者すらあり、而して一方に於ては全然之と反對に、社會の大勢の回へし難きに係はらず、今尙は貴族昔日の榮華を忘るゝ能はず、如何にもして昔日の特權を回復せんと、過激なる反對運動を試みる者あり、此等の現象は吾人をして、轉た我邦維新革命後の社會を聯想せしむ。

(4) 都民 露國の都民とは實業家、商人、職工等の總稱にして、吾人の注目を怠るべからざる一大階級なり。

露國の實業界が隸民制の爲めに妨害せられ、爲めに其發達の遅々たりしことは予已に之を云へり、而も此制廢止以前即ち千八百五十五年の頃と雖ども、商工業家の収入は敢て貴族に劣るところ無かりし程なりき、去れば隸民制の廢止と、之に續きし政策の變更は、資本家の爲めに一新局面を開き、政府亦多額の補給金を與へて之が發達を獎勵したりしかば、實業界は俄かに長足の進歩を爲し、驚くべき都府の繁榮を呈したりき、千八百五十八年に於ては、全國民の七分二

厘五毛なりし都民の數は、千八百七拾年には九分二厘に増加し、千八百五十五年には二億二千八百万「フランク」なりし株式會社の資本金、千八百七十九年には六拾億「フランク」に増加し、又商業上の特許及び認可權を有する人も、同一の割合を以て増加したりき、此の如く商工業社會の發達は、多額の正金と莫大の土地を都民の手に収容せしめ、貴族等の賣却せし封土は皆な其の買占むる處となり、其他學校にも都民の子弟多く入學し、劇場、新聞社等亦悉皆彼等の建設に懸りき。

都民の勢力益々増加すると共に。彼等は漸く政治上に容喙せんとするに至れり、政府は及ぶ限り此傾向を壓抑せしが、其要求の性質に由りて之を採用せし事もありき、現に政府は資本家の請願を容れて鹽稅を廢し、或は芬蘭との間に於ける關稅率を高めたりき、最近三十年間に於ける露國商工業の發達は、都民をして社會の重要な地位を占めしめ、金錢の勢力は全國を風靡し、滔々として天を

衝かんとするの概あり、然るに此等商工業社會は、遂に露西亞の最有
力社會たるべきか、換言すれば人民の勞働力と國民的產物は全然其
手に歸すべきか、これ予が解釋せんとする一大疑問なり。

露國の事情に精通する者は、何人と雖ども此疑問に對して然りと云はざるべし、何となれば露國の資本家なる者は、俗に云ふ氣品高くして多少豪傑風を帶び、之を到底佛國の商工業社會が好く時代の精神を代表して、常に個人の自由と財權の不可犯所以とを唱導し、多數人民の友たると、全く行徑を異にするものあればなり、佛國の商工業者は彼等自身已に三級民サードエスティア(平民と云ふほどの意)にして、彼等を除きては眞の平民無しと雖ども、露國の商工業者は小説家等の最も注目する階級にして、三級民と隔絶する處大なり、一言すれば露國には三級民無きなり、是に由りて之を見れば、露國都民が眞正資本家たるの資質に於て欠くる處ある、強ち想像に難からざるべし。彼等が此の如き非商人氣質は、恰かも我邦士族上りの商人が不人望

なりし如く、一般に露國人民の反感を買ひ、有識者は彼等を排斥して農民を保護し、地方自治体の發達を圖るに非れば一國の富強得て期すべからず、佛國にては都民は新社會の預言者なりしも、露國の都民は全く一時の不可避弊害なりと痛言するに至れり、要するに露國都民が一時の繁榮を來せしは、勞働生産の結果にあらずして、多くは他より剝取り同様に得たる者なり、商工業社會の不正直不信用なる蓋し露西亞の如く甚しきは無るべし、露國商工業者が破産したりと聞けば、誰しも例の詐欺に因せし破産かと默會し、普通の失敗より來れりと云ふも、之を信する者無き程なり、去れば公私財政界の腐敗は實に甚しく、國家の收納官吏は恰も藏番に備入れられたる盜賊の如く、收賄、請托、殊に南部地方には紙幣賈造密輸入等盛んに行れ、又私立銀行會社等も繁榮なる者は、盡く不正手段に依りて富を致したるならざるは無く、大資本家と稱せらるゝ輩は猶ほ我邦の所謂御用商人と同じく、政府官吏との私托賣縁に依りて不正手段

を行ひ、今日の暴富を致したる者ならざるはなし、故に正當の手段を用ひて錢を得んとするものは愚人視せられ、迂濶者と嘲けらる、現に最近の露土戦争及び莫斯科、リアザン間鉄道敷設の時等には、狡猾なる商人等恰かも群蠅の腐肉に就くが如く、時の官吏と結托して不正品を收め、莫大の利益を占めし者多しと云ふ、彼等が此の如くして得たる金錢は、幾多の罪惡、不道徳を媒妁し、其毒流は滔々として露國全社會に波及しつゝあり。

村落商人亦以上に異なることなく、已に陳ぜし如く、隸民解放は土地の不足と租税の重荷とを來たりたりしと共に、農民をして貧困の餘所謂高利貸の毒手に歸せしめたり、是に於てか折角隸民制廢止に依りて農民に歸せし地方自治權も、可惜殘忍酷薄なる高利貸等の横奪する處となれり、此の如き惡弊は誠實敬虔にして獨立自活を重んぜし露國農民をして、漸くに其風に感せしめたり、何となれば租税を拂はざれば嚴しき鞭撻虐待を受く、而も正當の手段を以てしては金

錢を得る能はざるのみか、到底一家を糊する能はざれば、農民中氣力と猾智に富みたる輩は、漸次に此等の社會に入り已れ亦更らに農民の膏血を絞りて、巨多の利益を占むるに至れり、「農民等は愚鈍にして生活の方法を知らず、他を蠶食するに非れば己れ他より蠶食せられん、」此の如き處世術を以て村落商人等は農民を虐待しつゝあるなり

之を要するに露國の商業社會は種々異様の團體にして、未だ明確なる社會思想を有せざるなり、再言すれば其社會の何人も如何にせば可なるかの階級的傾向を自覺せざるなり、此の如き境遇に彷徨する間は、都民は決して最有力社會たる能はざるべし、而して彼等は何時迄此境遇に彷徨すべきかは未定の問題にして、予の茲に斷言する能はざる所なり

第八 經濟界及び産業界の狀態

(い)天然の富源(ろ)クリミア戦争後の經濟事情(は)工業界と保護政策の失敗に露國の財政紊亂

(5)天然の富源 露西亞の地氣候近寒にして、英吉利の如く一年數度の收穫を爲すを得ずと雖ども、地味の膏腴と夏季の暖熱に依りて、南部露西亞地方は小麥の生産に適し、北部露西亞には夥多の木材を出し、裏海及び北氷洋其他の諸大河は水産物に富み、中央露西亞の山中烏拉爾等の諸山亦貴金屬及び其他の礦物礦石の寶庫たり、露國が此の如く天與の富國なるに拘はらず、國民の多數は一塊の麵麩にすら鑿かざるは何ぞや、これ職として其政治の組織宜しきを得ざるが爲め、痛く人民の生産力を滅殺したるに由らずんばならず、露國の統計不完全にして、精確なる國富の現況を知る能はずと雖ども、露國本部一年の收入総額は殆んど三十七億万「ルーブル」と見れば大差なかるべし、之を住民八千四百万人に割附くる時は、各一人の所得四十五「ルーブル」に過ぎず、而も全額の二割三分即ち八億八千五百

万「ルーブル」は國家之を吸収し、富人に至りては一人を以て數千「ルーブル」を費消する者あり、而して村落小學教師の年俸百「ルーブル」乃至三百「ルーブル」にして、尙ほ且つ不足勝の生活なりと云ふを見れば、平均一人前四十五「ルーブル」の半にも相當せざるべき、多數農民の生活の如何に困難なるか、推察するに難からざるなり。

加之露國の人口は最近三十年間を平均して、毎年一分二厘餘の割合を以て増加しつゝあり、而も生産力は同一の割合を以て増加せざるが故に、經濟上の困難をして一層甚だしからしむ、勢ひ此の如し、人民が近年時に暴動一揆を起して革命運動を企てんとするも、必ずしも所以無しとせざるなり。

露國の最大富源たる農業の不進歩實に驚くべきものあり、露人は沼澤を乾燥することを知らず、森林培養法に通せず、牧畜の飼養法亦拙劣にして、殆んど田畑に肥料を施すこと無し、英國の耕地は全面積の六割一分、佛國は八割三分なるに、露は僅か二割一分五厘にして、而も耕耘の方法不完全不生産的なりと云はゞ、其状態を推知するに難からず、礦業漁業其他製造工業等亦皆、之を以て一般を推察するに足るべきなり。

(ろ) クリミア戦争後の經濟事情

クリミア戦争は露國の經濟社

會に取つては、實に好箇の興奮劑なりき、上はニコラス皇帝より下は一介の農夫に至るまで、自國の經濟的發達が痛く西歐諸國に劣れるを驗知し、之が革新の必要を自覺したりき、此際有識者が最大急務と感せしは、一方に於ては從來發達し來れる地方自治体の勞働方法に、適宜の保護改良を加へて農民の生産力を増進せしむると同時に、他方に於ては從來資本家等の獨占に歸せし製造工業を彼等より収めて、政府の手に一統せしめ、之を近世的組織となすに在りき、然るに露政府の經濟政策は全く之と反對に出で、徒らに皮想上、西歐の組織を模倣するに急にして、是等の重要なる經濟的根據を無視したりければ、爲めに甚だしさ不調和を來たし、農民生産力の自然の發

達を妨害したりき、詳言すれば地主若し改良を行はんとするも、政府の方策に支障せられて意の如くする能はざりき、此の如くして争てか農民の實力を養成し得べけんや。

既に言ひし如く露國經濟界の盛衰は、一に懸つて農産物に在り、農産物と工藝品との割合は、現今殆んど八十三と十の比例にして、露國輸出高の殆んど九割以上に相當す、而も政府は之を忽諸に附して顧慮すること無し。

農奴解放は露國の大地主をして、其所有地の三割七分を農民の手に歸せしめたれども、彼等は狡猾にも瘠地をのみ農民に與へたりき、然るに従來此等大地主が目的とせし處は、唯だ地代を徴収するにありて、嘗て耕作法を改良し土地を肥沃にせし事なく、自から耕耘せし土地は其一割四分五厘にして、其三割六分は之を農民に貸付け、殘餘は徒らに荒地として鋤を入れざる程なりければ、解放後は一層甚だしく其の良田を保有せしに關はらず、農民の惡田よりも遙に生産

力を減ずるに至り、甚だしきは可惜良田をして見るく荒野と變せしむるもありき。

農民は解放の命と共に、一旦は自由の身と爲りたれども、彼等が大地主より得し土地は惡質にして、加ふるに政府は土地の買戻に對して堪ふべからざる重税を課し、剩へ村落の商人或は高利貸等を保護して、縦まゝに其の膏血を絞らしめければ、農民の慘况名狀すべからず、嘗だに其生産力を消磨するのみか、莫斯科地方に於ては農家の一割五分は耕作の方法無き迄に窮乏し、其他の地方と雖ども殆んど過半は、過酷の租税と兵役徴集の爲めに零落しつゝあり、又露國を通じて、家畜は其需要の半ば程も之を有せずと云ふ、以上の諸原因に由りて土地の生産力は益々減殺せらるゝと共に、加ふるに亞米利加及び印度の農産物は國際市場に於て漸くに露國の顧客を奪はんとするの傾向日に熾ならんとす、露國の農業保護は、是に於てか大旱の雲霓よりも急要なるものあり。

(は)工業界と保護政策の大失敗 譬へば露國政府の經濟政策は一種の啣筒なり、限りある農民の財力を吸収して、一向に大資本家の培養に灌がんとす、水源一たび涸渇せば、争でか萌芽の發育を望むべけんや。

千八百八拾年に於て、政府の保護に成る會社銀行の總資本額は、實に六拾六億「フランク」にして其内譯は左の如し。

(一)瀛車瀛船會社

五、三七〇「フランク」

(二)銀行及保險會社

四〇〇「フランク」

(三)其他商工業會社

八三〇「フランク」

見るべし此中の殆んど八割は交通事業殊に不急の鐵道工事に充用したるを、これ即ち政府が國債と地方經濟を吸収して得たる資本を以て、専ら商工業家を保護し、且つ莫大の補給利子を賦與したる處にして、之が犠牲に供せられたるは憐むべき農民社會なりき、資本は政府之を補助して幾何も要せず、危險亦政府を担保す、これ恰かも開

いたる口に牡丹餅を投ずるものなり、世豈に此の如き好都合の事業あらんや、之を以て會社銀行の勃興すること雨後の筍も管ならず、皆争ふて政府の保護に預りき、千八百八十一年に於ける會社銀行の總資本額(政府自身の事業を除きて)は、五億五千四百萬「ルーブル」なりき、其中五億三千萬「ルーブル」は政府より會社に補助せしものにして、銀行會社自身の資本は、實に二千四百萬「ルーブル」の少額に過ぎず、此等商工業家は實に濡手に粟の攫み取りを爲せしなり。勢ひ此の如し、眞正商工業の勃興を望む抑も難ひ哉、是に於てか資本の開發を企てし政府の經濟政策は見んごとく失敗して、一方の目的たる近世的工業の眞正なる發達をも破壊したれば、此目的を達せんが爲め其政策は勢ひ二重の手段を要せざるべからず、去れば政府は莫大なる海關税を外國品に課して、層一層保護政策に傾き益々深淵に踏込むに至りき。

芬蘭の輸入品を防遏せんが爲め、莫大の關税を芬蘭製造品に課し、痛

く芬蘭人の激昂を買ひし由は予既に之を言へり、又露國と波蘭間には關稅の賦課無かりし爲め、波蘭人は常に露人に對して、貿易上優勢を占めたりき、而して土地均分制の爲め最近二十年間に、波蘭の工業は非常の進歩を來せしが、之と同時に日耳曼工業家にして露國の保護稅の爲めに苦められし者、續々波蘭に移住して工場を開けり、現にロツツ村の如きは日耳曼工業家を以て充滿せる程にして、彼等は盛んに此處より其製造品を露に輸入し、以て其市場を壓倒したりき、是に於てか露政府は、又もや私慾一遍なる商工業家の言に聽き、波露兩國間に重き關稅を課すると共に、日耳曼人の住居せし地を彼等に割與して國領外となすの愚策を採れり、此の如くして已まざるば、遂には露國の半ばを割讓するも、尙ほ且不足を感ずるに至らん。露政府の愚策は雷に之に止まらず、或は高加索を通じて印度へ達すべき鉄道には、工業家等利益の爲めに最短線を探らずして、少なからざる軍事上の不便利を來たし、或は外國輸出の砂糖を保護して、内

は國の消費に夥しき重稅を賦課する等、一々列擧するに遑あらず。露政府は此の如く國家の手足を殺ぎて保護政策を採れるも、露國の外國貿易は年々衰頽の有様なるのみならず、内國製造品の生産高も寧ろ減退の傾向あり、此際獨り年々増加するは貴金屬の輸出なり、嗚呼露國經濟界産業界の未來は歩一步暗黒に赴きつゝあるもの、如し、知らず露政府は如何にして之を整理せんとするや。

(一)露國財政紊亂 適當の監督を欠ぐが故に、專制政治の下に於ては、往々財政の不整理を來し易しと雖ども、露國に於ては其最も甚しきを見る、國民的利害よりは寧ろ露皇の野心に原因せる屢次の戰爭は莫大の國帑を靡したるのみならず、露政府の保護政策は益々歳入の不足を惹起したりき、而して政府が此缺陷を彌縫する常套の方策は紙幣の濫發と國債募集に依るの外無かりき、千八百五十六年より千八百八十三年に至る廿七年間、政府が借金政策の一般は實に左の如くなりき。

- (1) 經常歳入 一二、七七七^百「ルーブル」
- (2) 國債 二、八八七「ルーブル」
- (3) 紙幣 五五〇「ルーブル」

見るべし、政府は經常歳入の五分の一以上を紙幣發行と國債に依りて之を補填せしを、又見るべし、政府は年々平均一億「ルーブル」の負債を遞加しつゝあるを、此の如くして露政府は是等負債の利子として、年々歳入約九億「ルーブル」中の四分の一を充用し、其額は殆んど其軍事費と相匹敵せんとす、露國の財政は此の如く紊亂し來ると同時に、亞歷山三世の時には己に其極に近づき、外國債の信用は益々低落し、伯林に於ける募集にはビスマルクの手を假りて、漸く應募者を得るに至りし狀況なりき。

第九 思想界の狀態

(1)「有識者」の勢力と所謂「虛無黨」の勃興(2)露國の大學校

「有識者」
は各社會
の代表者
なり

(3)露西亞文學の狀態

(1)「有識者」の勢力と所謂「虛無黨」の勃興 露國思想界の大勢を左右し、一世の木鐸と爲り國民を誘掖指導する者は、所謂「有識者」てふ一團にして、其が有形無形露西亞の文化に及ぼす勢力の大なる、實に驚くべきものあり、露國にては各階級それ／＼の意見思想を代表する適當の人士無きが故に、是等「有識者」は彼等の主義原則に適合する時は、各社會に代りて其思想を發表し、其意見を主張するを以て、彼等の天職とは爲せるなり。

「有識者」の初めて露國に發生せしは、恰かも隸民制最も盛んに行はれ、貴族等が跋扈を極めし時代なりき、故に彼等は發生の當時より自由と平等と民政主義とを以て標幟となし、多數人民の利害に伴ふものに非れば正理公道に非ずと爲しき、即ち露國專制政治は彼等が殊に不俱戴天の仇敵として、全力を盡して攻撃せるところなり、彼等の詩人は曰く、「百弊の毒泉たる獨裁政治は善中の純善なる者を壞滅

し、剩へ吾人の君主を暴君と爲しき。『自由より暗黒に彷徨ふ奴隸を光明界に導け！露西亞皇帝をして汝の聲を天上の雷鳴の如く感せしむるか爲め、冀くば羅馬のブルタス及び瑞西のテルを地下に呼起せ！』と、此の如く彼等は露皇を敵視せしのみならず、又最も貴族等特權階級の一大強敵たりき、彼等の中亦貴族出身の人多かりしと雖ども、多くは民間より採用せられし所謂新進貴族なりき、彼等は舊に時代の精神を代表せしのみならず、又其中より多くの實學者を出したりき、即ち電氣の發明を以てフランクリンと光榮を争ふ、ロモノソフはアーチャンセルの漁夫なりき。

彼得大帝獨り英邁の姿を以て、精勵歐洲の文明を輸入したりしが、其他の諸皇に至りては、大帝の創見なく大帝の熱心なく、固より學者、軍人、建築師等を優遇し、又文學美術を愛好して其宮室の粧飾と爲せしと雖も、保護は徒らに此に止りて其文明が一旦自家の利益に反するを見るや、彼等は極力之を勦滅せんとしたりき、『有識者』の多くは

即ち此等被保護者より生出して、盛んに自由、平等を唱へ、帝政及び特權社會を以て、多數人民の利益に反對する者なりと布告し、一方に於ては個人の人格を發達せしめて、品位の感覺を人民に鼓吹したりしかば、政府は是等の思想を以て、專制政府の基礎を殆からしむる者となし、之を滅盡せんが爲め盛んに迫害を行ひ、亞歷山一世の如きは最初自由主義の假面を被りしも、後には極端なる壓制家と豹變し、ニコラス一世以來政府は公然壓制政略を執りて、現時と雖も迫害已む時なし、斯くて有名なるクニアゼニンは其の悲劇稿本の没収と家族の誅殺に遭ひ、ノヴヰコヴは城砦に幽閉せられ、ラヂヰケエツヰ亦纒かに死刑を滅せられて、西比利亞の荒野に放逐せられ多少我邦人に知られたるトルストイ伯、ドストエヴスキ、ツルグエネーヴを始としてアレキサンダーヘルチエン、チエルニチエヴスキイ等或は誅戮せられ、或は禁錮せられ、或は放逐せられ、家宅搜索苦刑、等文士にして前後迫害を受けし者枚擧に遑わらず、予は一々

是等思想家の意見を讀者に紹介する能はざるを憾とすと雖ども、要するに彼等の思想は大同小異にして、其思想の堅實にして信仰の不屈不撓なる、一難を経る毎に一倍の勇氣を加へ來り、政府の干渉壓虐甚だしきに拘はらず、或は新聞に或は小説に或は詩歌に、専はら通俗の文字を以て、多數人民に其思想を傳播せんと努めしかば、多少文字を知り事理を解する者は、忽ちにして是等露西亞のルーソウ・ヴォルテールに感化せられたりき。

『有識者』は此の如く生出し、此の如く成長し、而して此の如く發達し來りて、十九世紀の半頃に至りては露西亞全國に蔓延し、其根幹一層蹠蹠して學校、教會甚だしきは軍營内にも之を見るに至り、政府如何に根絶せんとするも、最早牢乎として抜くべからず、彼等の主張鼓吹一層盛んなると共に、苟くも智識を需め正理を愛し、而して批評的精神に富めるの徒は、其の如何なる階級に屬するを問はず争ふて彼等の旗下に參集し、各自相互に道德的精神的關係を以て交

通し、遂に一個危然たる特別階級を形成するに至れり、而して彼等の行動たるや純然たる革命運動にして、口を開けば帝權の過大、特權の廢止を唱ふると同時に、人民の權利と個人の自由とを主張せざるは無し、故に十九世紀に於ける露國政變の動機は、常に是等『有識者』の司る所にして、『有識者』は實に露西亞の梁山伯なり、百八ならぬ無數豪傑は常に政治界に出沒隱見して、政府を驚惶憂慮せしめたりき、去れば彼等の歴史は即ち一方に於ては露國の文明史たり、而して他方に於ては、露西亞の政治史の大部分を占むる者と云ふべし。

彼等は盛んに英、佛、獨等より新思想を輸入して、益々眞理の探求に眼めしが、彼等は最初より人民の利害と、人民の自由とを以て其標幟と爲せしかば、人民の名を以て運動するの最も効驗あるを感ずるに至れり、故に彼等は人民と接近し、親しく其生活の狀態に就きて研究を始め、而して之が研究を重ねると共に、益々露國現今の政治

根底より
更革すべし

所謂虚無
黨

が多数人民の幸福、利害を馳背するを感じ、現制度を改變するのみにては、到底満足すべからず、宜しく之を根底より更革するの必要を見たり、然るに此理想を現實にするには、到底普通尋常の手段を以て遂行すべくも非ず、これ彼等の大に憂慮窮蹙するところなり、斯くて或者は時節を待ちて、暫らく其思想を蓄蓄するが爲めに哲學的研究に傾き、漸くに厭世主義に變ずるあり、或者は其信仰を堅固ならしめんが爲めに宗教的冥想に陥り、又或者は公然たる政黨と變じ、恰かも佛國革命の『ジャコビン』俱樂部の如く、極端なる破壊的革命黨と爲り、密計隠謀を逞ふして一向に政府及び皇室を轉覆せんと企てつゝあり、世人をして其名を聞くに戰慄せしむる所謂『虚無黨』なる者は即ちこれなり。

(2)露國の大學校 露國に六箇所の官立大學校あり、即ち聖彼得堡セントペ、モスクワモスクワ、カザン、キーヴ、カルユヴ、オデッサこれなり(此他ヘルシングフォルス、ドルパット、ワルソウの三大學校あれども

是等は露國人の建設せしものに非ず) 現今殆んど一万の生徒を有し創設以來大學出身の人数、少くとも十万人に近しと云ふ。

六大學とも官立なるが故に、勿論其講師は政府の任命に係り、學生亦國費に負ふところ大なるが故に、政府の命令以外に脱することを得ず、今日と雖ども其研究の結果を公行するには、一々檢閲官の檢閲を経ざるべからず、而して講師は純然たる政府の奴僕にして、學問を教授すると云ふよりは、寧ろ政府の命を奉じて生徒を監察すると言ふを以て適當なりとす。

蓋し露國政府が大學設立の趣旨たるや、學生をして學術の蘊奥を研究せしめ、其結果を社會各般の事業に應用せんとするに非ずして、彼等を狹隘なる坩堝に熔解し、從順なる人物を養成して、以て專制政府の從僕たらしめんとするに在り、去れば政府が大學を見る事恰かも停車場を改廢するが如く、其意の儘に制度を變更し、時に應じては之を全廢するをも決して躊躇せざるなり、其講師たる者も普通

大學講師

大學を見
る事停車
場と同じ

官吏と同じく、固より學者的獨立を有せず、一々政府の鼻息を窺ふて生徒を教授せざるべからず、講師若し或る學科を教授するに當り、露國政府の趣意見解に違反することあらんか、反抗若くは叛徒を以て目せられ、危禍忽ち身に加はる、有名なる講師グラノヴスキイは歴史を教授するに、佛國大革命或はルーテルの宗教改革を講ずる能はざるの不平を一友に訴へたる事ありき、大都督ドレンシチは千八百八十六年頃、キーヴ大學の講師等に演述すらく、『大學は近來露國に生せし罪惡に關して、重き責任を負はざるべからず、弊害の根元は講師諸君が餘りに俗流に媚んどするに存す』と、露國政府が大學講師を遇する概ね此流にして、多少の氣骨と見識を具ふる者は、概ね貶竄の厄を免れず。

次に政府が大學生を遇する、恰かも普通兵卒を遇するが如し、亞歷山一世は大學の草創より、已に其生徒を迫害して毫も假借せず、惡むべき監察官マクニツッキイは大學を視察して皇帝に復命すらく、『今

大學には不健全の空氣充滿せり、寧ろ之を壊滅するに如かず』と述べし程なりき、又千八百三十九年ニコラス帝は、親しくキーヴ大學に臨みて學生に演説せり、曰く『卿等能く學ぶ、然れども學問のみにては好結果を奏するものに非れば、決して之を以て充分と稱すべからず、朕は卿等が無限の從順、理屈無しの服從、否な絶對的遵奉を表する皇室の忠臣たらん事を望む』と、ニコラス以下の諸帝亦皆、此演説と同一主義を以て大學生を統御したりき、之を要するに政府は大學講師、學生に命するに一の政治的職掌を以てし而して柔順なる朝臣を製造せんが爲めに、之に適當なる思想を學生に鼓吹しつゝあるなり、別言すれば露國政府は大學をして、拿破翁一世が嘗て夢想せし如き、『公論會』の役目を爲さしめんとしつゝあるなり。

政府の趣意、方針の如何に關はらず、大學は何處迄も行政府の干渉を脱して、最高教育府たる自然の目的に向はんとす、換言すれば其

本分たる知識の自由を要求し始めたり、是に於てか勢ひ政府と衝突せざるべからず、政府は講師撰擇の好武器を有するに拘はらず、其講師を招聘するにも、所謂「有識者」より之を求めざるべからず、これ政府の甚だ危む所にして、不得已外國教師を備入るの外無し、去ればこそ露國大學に「獨乙人時代」なる奇態の現象を呈出せしなれ、然るに此等外國教師は固より露語を解せざれば、羅匈語若くば獨逸語を以て講述するの不便に加へて、素より政府の都合次第に任ずれば、生徒の利害は彼等の眼中に存せざるのみならず、又少しも露國社會の事情に通せざるが故に、其の授くる所甚だしく實地と扞格して、學問が一國の知識に益するところ尙に少なかりき、此の反動としてニコラス帝の時、莫斯科大學は純粹露國講師を多く招聘したるが、既に述べたるグラノヴスキイ之が牛耳を執りて、學問と社會とを近接せしめんが爲め、眞正科學を生徒に授けて朝臣ならざる眞正人物の養成に力を致さんとしたりき、然るに此等個人的思想を發

達せしむるは、これ取りも直さず革命運動の舉措なれば、政府は容易ならざる大事として之を壓伏したり、然れども火山は何處迄も噴火せずんば已む者に非ず、グラノヴスキイが鼓吹したる思想は、今尙は露國大學に其餘焰を止めて、何時か暴發せんとするの勢あり。大勢の抑へ難きを見て、政府は大學生の人員を三百人に制限したりき、亞歷山二世の時此制は解かれたりと雖ども、之に代ふるに從來五十「ルーブル」なりし聽講料を百五十八「ルーブル」に引上げ、現今は科目の多寡に應じて徴收する事となれり、(露國政府が大學費に充つるは一年二百六十万「ルーブル」にして全歳費の二分五厘に當る、又學位を授與するにも金錢を徴集す)

大學講師は生徒の不穩取締役に過ぎざれば、有爲有識の人士は袖を聯ねて去り、残れる者は多く無學無識の軟骨男兒にして、幾多の希望と疑問を抱きたる地方青年一たび大學の門に入れば、講師の卑屈無學に失望し、仰いで師と爲すに足らざるを覺り、不得已講義以外の

手段を以て、多年の希望と疑問を氷解貫徹せんとす、去れば學生は教科以外の書籍、博物館、圖書館、試験室に依頼し、學校は唯だ彼等に器械的職分を盡すに過ぎず、學生は是等の手段に依頼するのみならず、或時は政府が嚴禁する禁書を讀み、或時は所謂「有識者」に就きて思想の感化を受けつゝあり、此の如く他に依頼する丈け其れ丈け彼等は講師に對して敬意を欲ぎつゝあるなり、是に於てか講師と生徒の軋轢甚しく、所謂「學校騒動」は諸方に續起し、政府は之を威壓せんが爲め、警官をして生徒の戯語をも立聞せしめ、又は公然官吏を學校に臨監せしむる等壓制監視至らざる無きも、而も一事件毎に生徒の不平は益々氣勢を増加し來り、反動は反動を起し、一波は一波より高く、革命的空氣は磅礴として大學内に充溢し、中には虚無黨と竊かに氣脈を通ずる者を生ずるに至れり、然れども是等學生は決して學校騒動の張本人に非ず、彼等は深沈にして禍心を包藏し、靜かに機運の至るを待つあるもの、如く、反つて他の政府の壓制を

憤りて濫りに躍起するの徒を鎮撫しつゝあるなり。

極端より極端に馳るは事物必至の勢、露國政府は其專制政治を以て幾多有爲の青年を精神的に虐殺しつゝあるも、大學内に鬱勃たる不平は、何時か大に醗酵せずんば已まざるべし、注意すべきは露國大學の未來なり。

(3) 露西亞文學の狀態 露國の如き專制國に於ては、文學は政治上及び社會上の意見を發表する唯一の機關たるは、恠に自然の數にして、露國文學の最も重要なる所以又こゝにあり。

露國は二百年以前已に國語を有したりしも、露國文學の基礎の確立せしは、實に彼得大帝の治世なりとす。

之を美術作品若くは商賣品として見る時は、露西亞文學は數多の缺點ありと雖ども、想形共に放膽にして天真、創意に富み、且つ最も忠實に社會生活を描き、嚴酷なる檢閲官の下に在りて、腹藏なく所思を述べたるどころ、他に見るを得ざる特色なりとす、「有識者」は

政府の壓制の爲めに、公然政治に容喙する能はざるを以て、此点の比較的寛大なりし文學界に遷れて、其鬱憤を漏らしたりければ、露國文學は實に創立以來百五十年間に於ける、國民的才華の煥發したる一大特産物と云ふべきなり。

露國に於ては文學は、國民思想を發達せしむる唯一の機關にして、又最も名譽ある社會的事業なるが故に、文筆を售りて糊口の料と爲すは、極めて不名譽とせられ、出版物の賣高を問ふは、露國文學者の最も耻辱とする處なり、『新時事』の主筆スーヴャリン、は『今や文學も其高臺より下りて他の職業の如く、需要供給の大則に支配せられざるべからず』と論せしが爲に、文學社會は無耻無節操として、散々に彼を攻撃せり、又ポウチンは『何の必要ありて詩人は安樂を冀ふ歟』と喝破し、ゴーゴルは不朽の傑作『死魂』を捨て、荒唐なる『謀反人』の往復文』を出版し、トルストイ伯亦現に財慾に淡さを以て有名なり。

露國文學の開祖なる『唯理論派』は、ニコラス一世の治世政治的迫害の最も甚だしかりし際に於て發出せり、當時專制政治の毒手は常に政治上のみならず、普ねく社會各般の事業に及び、學校は閉鎖せられ、科學は禁止せられ、『有識者』が其驥足を伸ばすの餘地は、唯だ文學界ありしのみ、否な文學界迎も檢閲官の干涉嚴酷なりしと雖ども、彼等の暗愚なる寧ろ文學を輕蔑し、以て一國の大事を動かすに足らずと思惟したりき、現にニコラス皇帝は『唯理論派』の大家ポウチキン及びゴーゴリを保護し、ゴーゴリの有名なる喜劇『校閲者』が、暗に皇帝の行政を嘲笑せしをも覺らずして、双手を擧げ之に喝采したりき此の如く當局者の無學と不注意は、文學の發達に取つては偶然の僥倖にして、政治小説の看板を打つて出さざる限りは、政治及び社會の事を諷刺論評するも、檢閲官の目を竊むこと容易なりき、去れば苟くも志を當世に抱ける『有識者』は、争ふて文學界に入り來り、各自獨創の技能を發揮したりき、一國に於ける文學の地位此の如く卑

かりければ、法律及び社會の目より見れば殆んど「ゼロ」なりし卑賤なる人間も文學上に於ては決して社會及び政府の主權を承認せず『予は予の理解と才智と知覺の支配に従ふて行動す何人が予を左右するを得ん』と盛んに人道主義を唱導したりしき、此の個人の權利を主張する人道主義こそ纏て露國政府をして夢寐の間をも安からしめざる革命派の萌芽にあるなれ。

此の期間の二大明星は、チエヴヰチエニコとゴーゴルなり、前者に關しては予已に第二章に於て之を言へり、後者は實に露國社會小説の開祖にして、文學をして實社會に接近せしめたるは、彼の功多きに居る、彼は社會の實相を描寫するに努めしと同時に、之を諷刺批評し、其諷刺批評の筆は遂に拘束の範圍を脱出して、漸く政治上に暗刺を加ふるに至り、後年露國文學の一大特産物たる諷刺文學の緒を爲せり、ゴーゴリに次げる批評文學の大家はビエリンスキーなり、ツルグエネーヅは彼を評して、『露西亞のレッシングなり』と云ひし

如く、彼か天稟の批評眼と博大なる社會的同情は、其犀利なる筆鋒と相待ち、露國文學に貢献せしどころ大なりしのみならず、彼は又露國々語の大家なりき、批評術の進歩に斯く美文の範圍を脱して、哲學、社會學、政治文學より、其餘波は流れて個人の權利の貴重なる事、各人自治獨立の大切なる事に及び、遂に頑陋なる露國政府をして、奴隸解放を斷行せしめたるは、重に批評術の功績として之を認めざるべからず、從來社會に輕視せられし文學の勢力の、漸く一般に識認せられしに當りて、クリミア戦争の勃興は端なくも、一層文學界の振興を促したりき、露西亞は今や危急に瀕し、政府の信用は地に墮ち、改革の急要は口耳相接して語られたり、而るに此の如く政治上の活氣を發揚するには、文學は免るべからざる武器なりき、此等危急存亡の大勢は、遂に亞歷山二世をして、從來政治を論ずる事を禁じたりし新聞雜誌に、多小の自由を與へざるの不得已に出でしめたり、已に一寸を伸ばしたれば、一尋を伸ばさんとするは自然の勢な

り、政府は之に制限束縛を加へんとするも、滔々たる大勢は恰かも
 決河の如く、政府の反動派は屏息傍觀して如何とも爲すこと能はざ
 りき、幾多の雋才は此際に輩出せしか、チェルニチエヴスキイ及びド
 ブロリウボヴの二人は、最も能く此時代の精神を代表したりき、而
 して此時代文學の功績は、實に奴隸解放の決行を以て其第一に數ふ
 べし。

新聞雜誌の振興と共に、『有識者』等は此勢を以て進まば、平和手段
 にあれ過激手段にあれ、早晚自由と正理を基礎として、露西亞全國
 の改造を實現し得べしと想望したりき、新聞雜誌も亦此の如き目
 的を以て、國家及び社會のあらゆる弊害を指摘攻撃して、一舉に革
 新を決行せしめんと政府に促迫せしも、少しも其効果無く諸人か豫
 期せしか如き大改革は一時の夢想たるに過ぎずして、焰々たる猛火
 は政府の面に於ける反動派の勃興と共に、漸くに消滅したりき。一
 時露國の文壇を獨占し、露國社會の唯一機關として、『人間の如何

大革命來
 らずして
 「有識者」
 大言

なる事業よりも、大なる石碑を建設せん』と期したる純文學及び批
 評術は、新聞雜誌の振起に由りて、其本領を侵奪せられたりき、從
 來純文學及び批評術に盡せし諸雋才も、政治熱の興起すると共に、一
 齊に其筆端を此方面に向け、純文界は爲めに一時落莫の狀況に陥り
 たり、勿論此際と雖も、多くの小説、稗史、詩歌出でたり、然れど
 も此等は皆な或る觀念寓意を含有したるに非るは無かりき、此等寓
 意小説の白眉にして、一世を聳動し幾多の小説家に感化を及ぼした
 るは、實にチェルニチエヴスキイの『何事をか爲すべき』なりき、而し
 て批評家も亦暫く筆を美術の批評に措き、専ら政治及び社會の批
 評に傾き、ドガロリウボヴの如きも全く専門の政治批評家と變し、
 其後繼者ピッサレヴの如きは、公然美術及び美學の敵と名乗り出で、
ハウチキン等の先輩大家を罵倒し去り、其希代の天才を曲辨と危言
 に費したりき、純文學の勢此の如く非運なると共に、亞歷山二世の
 改革は、幾多青年有爲の士を他の社會的事業に吸収し、一層文學界

の不振を甚だしからしめたり、然れども先輩大家に依りて、已に其根柢を鞏くしたる文學界は、容易に政治上の傾向の爲めに、滅絶さるべきにあらず、若し他の有害なる勢力の爲めに、其發達を妨碍せられざりせば、新聞雜誌界の蠶食に拘はらず、今日の如く萎靡不振の狀況を呈出せざりしなるべし、然るに他の有害なる勢力は、獨り純文學を衰微せしめしのみならず、併せて政治文學即ち新聞雜誌をも衰頽の境に擠したりき、他の有害なる勢力とは何ぞや、予が已に前に云へりし、露政府の側に於ける反動派、即ち保守黨の勢力これなり。

『有識者』の革新運動に對抗して興起したる、政府部内の反對派は改革派が各地方に散在して組織統一を欠けるに反して、其少數なるに拘はらず、結合力強く且つ組織的なりしが故に、其勢力なかくに侮るべからず、然るに彼等は、政府が充分依頼する丈の實力を有せしに非ずして、實は武斷主義を以て改革派に臨み、あらゆる防壁

を試みて革命運動を妨害したりき、是に於てか『有識者』等の改革派は豫期せし進歩革新の一も成功せざるに失望沮喪せしが、一方には彼等の中より、極端なる革命派即ち社會黨(虛無黨)の一團を出すに至れり。

最も多く此反動派の影響を被りしものは、實に文學界なりき、文學殊に新聞雜誌は、其以前既に相應の發達を爲し、神、人、主權者若くは自由、平等需要、供給等の如き、人間社會の大法則に於ては、充分の論議を盡し、今は空漠たる哲理よりは、寧ろ實際問題に就きて論議せんとしたりしなり、一言すれば狹義に於ける新聞雜誌の職責を盡さんと欲せしなり、然るに反動派に督促せられて、檢閲官の嚴酷層一層激甚となり、新聞雜誌は盡く其口を箝せられたれば、有爲達筆の記者は皆政治文壇を退き、新聞雜誌界は俄かに秋風落莫の慘況を呈したりき、残りたる記者等もかゝる言論窮屈の時勢に處しては如何とも爲す能はず、絶世の大才と深遠の思想を抱きて、暫らく

政治文學界に苦戦せしシカイロヴスキイが、遂に耐忍し得ずして鉄道事業に従事せしは、最も好く此時代記者の窮境を代表したるものなり、勢ひ此の如し、世に言論を禁せられたる新聞雑誌は憐むべき者は無く、亞歴山二世及びニコラス一世の治世に生存せし政治新聞は多く政府の御用新聞たるか、然らざれば無益無害なる漂流的新聞のみなりき、然れども之れを一方に壓すれば他方に伸ぶるは自然の數にして、本國政府の壓制の爲めに、露國人にして從來他邦に於て新聞紙を發行したる者多かりしが、今や露國の中央に於て、虛無黨の新聞は秘密に發行せられて、最も過激なる革命主義を鼓吹せしむ、未だ一世の風潮を左右するに足らざりき、而して『人民之意志』なる雑誌は、此中の最も鋒々たる者なりき、之を要するに此期間に於ける新聞雑誌は、ニコラス一世の時の如く、殆んど全滅の慘況にはあらずして、兎に角生存したりしと雖ども、何等の勢力なかりしなり。露國政府の暴壓之に止まらず、千八百八十一年及び千八百八十二年

政府は新聞雑誌に於て論評すべからざる題目を公告し、千八百八十四年には百二十五種の書籍を讀むを禁じたり、此禁書中には多く外國の書籍もありて、スードルの『共產主義』を始として、スペンサー及びアマム、スミッスの書籍、亦同一の厄運に遭遇したりき、これ取りも直さず、露國の專制政治が英佛等民主國に移住したると同様なりき。

政治文學の此の銷沈と共に、諷刺文學は一時露國の文界を獨占したりき、露國は元と諷刺文學の特産地にして、古來の文學皆多少諷刺的趣味を帶び、カンテマーの諷刺特に傑出し、フォン、ヴァシンの喜劇クリロヴの諸作亦、諷刺趣味を以て有名なり、降つて現時に於ても、ニークラツヅ(詩)オストロウスキイ(喜劇)クウロッキン、ミネーヴ等皆一代の明星たりと雖ども、クセドリンは其中の巨擘なりと云ふべし、彼が豊富の才思と該博の智識は、社會各般の事物に向つて痛刺を加へざるはなし、兎に角諷刺文學は現今露國文界の一大特徴な

秘密出版
の外見る
に足るも
の無し

物語類の
流行

純文學も反動派の勃興と共に、政治文學と同一の厄運を蒙り、千八百六十一年以來は檢閲官の壓虐と愚昧の爲めに、殆んど之が特權を殺がれたり、然るに革命派の運動と共に、其の記者等は虎口の難を冒して、社會生活の實狀を描寫せんとするが故に、此等の實社會を描寫したる作は、悉く人目を惹くべき傑作たるを失はざりき、之を反言すれば檢閲官の壓制甚だしきが故に、此時代に於ける露國文學は、革命家の手に成る秘密出版の外見るに足る者無かりしなり、何故に小説を作らざるかとの疑問に對して、有名なる露國の文學者は曰はく、『革命家に關せざるの小説は、露國に於ては全く虚言なればなり』と、露國社會の實狀又眞に然りしなり、此の如く危難を冒さざれば、小説を草する能はざるを以て、今や物語即ち噺チヤムは小説の領地を奪ふに至り、短篇の小話は至る所に流行し、斯道の大家オウスベンスキイの小話は大概三十頁を越えず、他の名家ガーケンの著作は、

二百七頁の小冊なる中に八種の物語を含めり、又此他露國の小説をして不振ならしむる原因は、社會生活の狀態不定にして整然たる區劃方式の存せざるが爲めに、是が眞相を捕捉するに由なきにあり。

第十 政治界の狀態

(1) 行政の腐敗(露西亞の政黨)

(イ) 行政の腐敗 露國の帝政と多數人民の間には、數百年間に亘りて解けざる一種の反感あり、これ職として爲政者が政權を獨占して、少しも多數人民に分配せざるの怨恨に由らずんばならず。

絶大無限の權力を把持し、何等人民の掣肘を受くる事なき露西亞帝政は、縦し人民の利害を心頭に置かざるにせよ、内治の盤根錯節を快斷するには、極めて自由の行動を爲し得べしとは、苟くも露國を觀察する者の齊しく想像する處なるのみならず、現に亞歷山三世アレキサンダー三世が未だ自由主義の假面を脱がざりし以前迄は、露國の『有識者』と雖ども

亦然か思惟せしなり、然れども少しく露國政府の内幕を窺はゞ、雖しも這般想像の甚だしき誤謬たるを感せざるを得ざるべし、ニコラス帝は告白せり、『露國の政治は各省政治なり』と、實に露國の中央集權は今日古今無比の盛況を呈したれども、其集中したる權力は皇帝に存せずして各省長官に歸し、皇帝の專制權は各省至る所に於て制限せられ、其の統治權は尾大不振の有様となり、各省長官は互に割據して自儘に法律を發布し、其間の統一を欠ぐが故に、號令數途に出で、衝突を生ずること多く、人民は其歸する處に彷徨す、約言すれば露國專制政治は各省政治にして、各省政治は今や其長官等の寡人政治に變せんとす。

此の如く不完全なる政治機關は、これ即ち百弊の泉源にして、又一種の伏魔殿たる所以なり、上に主權者の監督無く下に人民の掣肘無し、弊害生ぜざらんと欲するも得べからず、去れば露國の官吏は、大臣知事より巡查書記の末輩に至る迄、暴虐貪婪を逞ふせざる者無く、政府は社鼠城狐の巢窟にして、行政の荒廢實に甚だしく、文治的意味に於ては、露西亞は殆んど無政府なりと云ふべし、此の如くして行政の腐敗は偏ねく全國に傳播し、文治武備の兩機關共に悖德非行の府にして、官吏の收賄結托は常に絶ゆる事なく、之が爲に裁判事件興起するも、其の審問を深くする時は、政府部内に同穴の狐多く、爲めに一層事局を重大にし、數多の連累者を出すか故に、大抵の場合に於ては臭汚なる者に蓋する如く、之を追究せずして已むを以て例となす、而して露國行政の腐敗は陸軍部内に於けるより甚だしきはなし、露土戦争の時御用商人等、兵站部の官吏と結托して、臭氣紛々たる腐敗の食糧品を供用したるに、中に廉潔の官吏ありて之が採否を長官に伺出たり、然るに長官亦同臭の一人なりしが故に、廉吏の抗爭を排して強て之を採納せしめたり、又露國の軍隊にては、兵卒を獸類と同様に待遇し、上官は下官を打撲鞭撻しても下官は之を争ふ能はざるのみならず、上官の命とあれば不正の業をも決行せざ

兵卒の金
を奪ふ警官等盜
賊より手
取料を取
る

るべからず、又正理と信じて之を上告するも何等の效果無し、ボルク聯隊區のマトヴヰニコと呼ぶ大隊長は、多數の親族に分與せんが爲め兵卒の食糧を奪奪し、兵卒をして飢餓に陥らしめ、又た兵卒の俸給を横取りせし其上に、友人より兵卒に贈りし金銭をさへ奪ひし爲め、兵卒等は大に之を延争せしも、遂に勝訴を得る能はざるのみか、大隊長は依然として在職したりき。

警官の腐敗亦軍隊に異ならず、千八百八十一年頃一隊の盜賊横行して、ガークツ停車場附近の良民を悩ましけるが、這は其地の憲兵巡查等盜賊と合して、彼等をして其畧奪を縦まならしめ、其畧奪高の一割五分を手數料として徴収したりし事、後に發覺せり。又露國行政官が暴虐の一例を擧げんに、ペルムの知事死去せし時、ペルムの警部長は一般人民に吊意を表せしむる爲め、既に切符まで發賣したる公園の懇親會を、多數人民の反抗に拘はらず強て解散し、商業俱樂部の會議をすら中止したりき。

行政の奴
隸

地方官の壓虐に至りては更に甚だしき者あり、『農民は貴族の壓虐より逃れて、今や行政の奴隸と爲れり』とは、其眞狀を穿ちたるの諺なり、カネヅ地方の代官は農民に命じて贈賄品なる荷物を己れの家に運搬せしめんとせしに、農民等が其賃金を請求せしに、『政府の荷物を運搬するに、賃金を請求するの法何處くに在る乎』と叱責し、烈しく彼等を蹴仆したりき、而も代官は何の罰をも蒙らざりき、又カドリンスクの長官は、村落の餐宴に臨みて二人の少女に懸想し、其下僚をして不穩の舉動ありとの命令の下に二女を拘引せしめ、而して之を姦淫したりき、此の如く官吏の貪婪暴虐甚だしきか故に、教育ある良民は預じめ彼等に貢賦を献じて、其暴行を避けんとする者もあれども、農民の復讐的暴動は常に己まず、而して中央政府は農民を壓制するを事として其哀訴を容れず、反つて地方官の惡弊を増長せしめつゝあり、而して露國の官吏中には賄賂、隱謀、暴虐に對して、巧みに自己を辨護する事は男子らしき所行とせられ、却つて其

面目を施すものと爲すの風行はれ、裁判所の如き亦、正理を保障するの具に非ずして、徒らに『悪人の見せ場』たるの觀ありて、良民が生命財産の安固、殆んど依頼するの道無からんとす、以上の如き事例は實に枚擧に遑わらざるなり。

之を要するに露國行政の腐敗を救済するには、獨裁君主の上に立つ各自獨裁君主の専制を廢して主權を全く皇帝の手に回収し、一方に於ては地方的寡人政治の權力を殺ぎて、多數人民に政權を分與するに非れば不可なり、其弊根を切斷せずして、枝葉を剷除せんとするが如きは、畢竟無益の徒勞に過ぎずして、偶々弊害を増大ならしめん耳。

(ロ)露西亞の政黨 露國の如き専制政治にして、個人の自由乏しき國に正確なる政黨の存在せざるは、固より其所なるのみならず、縦し之ありとするも、其運動の不便大ならざるべからず、而して言論、集會の箝束甚だしきが故に、國民の多數否な教育ある人士と雖

ども何れの政黨に屬すべきや、去就撰擇に彷徨せざるべからず、去れば露國の政黨員たる者は、確固たる信念よりは、一時の愛憎感情に由りて、各自の黨派に屬せるが如し。

『山岳と森林の外は、露國に於て不平ならざる者無く』、露國人は先天的に革命黨員たるの資性を有するが故に、政黨の勃興には偏強の地盤と原素を有するが如きも、而も組織的なる真正政黨の生出せざるのみか、己に樹立せられたる政黨と雖ども甚だ少數なる所以のもの、露國人民の多數か、無學無識にして確乎たる信念を欠き、其舉措の甚だ波動的なるか爲めならずんばならず、此の如きは即ち露國政黨の一大缺點にして、又平和にして秩序的なる社會改革を爲すの一大障害なり。

露國に三個の政黨あり(イ)反動派即ち保守黨(ロ)自由黨(ハ)革命派即ち社會黨(我邦に虚無黨として知られたる者)これなり此他(ニ)「スラヴォニック」派と(ホ)國民派とあれども、前者は一黨派として數

ふべからざる程の少数にして、後者は『新時事』等の新聞を機關として、風のまに／＼其主義思想を變じ、常に勢力ある黨派に阿附媚從する一小團體にして、國民を指導するの勢力無く、單に國民思想を外國に紹介するに止まるが故に、外國人は時に之を露國黨と呼ぶことあり、而して文學上に於ても何等の効績なく、唯だ賣文を以て其目的と爲せるなり。

三大政黨の中、人數に於ては自由黨最も優勢を占む、先づ自由黨の性質より述べんに、讀者若し露國の自由黨を以て、直ちに西歐の自由黨若くは社會黨と同視せば大なる誤想に陥るべし、嚴正なる意義より曰へば、露西亞には一人の自由黨員無く、露の所謂自由黨の殆んど全体は佛國の急進派の如く、純然たる社會主義にして、其機關紙たる『歐洲通信者』の如き、熾んに土地國有の必要及び土地私有權の謂れ無き事を唱導せり、而して自由黨の政綱とする處は言論出版の自由、地方自治、多數の代表約言すれば立憲的政治の實行を期

するに在りて、其理想とする處亦自治自由を根據とせる社會、個人の獨立及び平等權、正當なる經濟機關に保障支配せられたる物質的地位等なり而して之を同一露國內の所謂社會黨の綱領と對比するに、千八百七十九年『人民之意志』に掲げたる八箇條の宣言書中亦普通撰擧、地方自治、官吏公撰、土地國有、言論出版の自由、經濟的及行政的單位として農民社會の獨立地方軍を以て常備軍に代ふべき事、工場を勞働者の手に歸すべき事等を含むし、自由黨の主義綱領と大なる逕庭あることなし、然らば兩黨の區別は何れに存するか、曰く其手段方法にあり、彼等は何れも政府を敵として之を轉覆し、以て民主政治を行はんとするの大目的に於て一致すれども、之を達する方法手段に於ては大に異なる處あり、社會黨は此大目的を達するには、如何なる激烈の手段即ち一大革命を賭するも之を辞せざれども、自由黨は之に反して可成溫和靜穩の手段を執り、序を追ふて事を遂げんとする漸進主義なり、兩黨の方法手段に於ける此の相違は

取りも直さず之を組成する人物に於て大なる相違の存する所以なり、少壯氣鋭にして活動力と獻身的精神に富める者は多く社會黨に屬して常に事を一舉に決せんとするが故に、時に過激粗暴に流れ、往々危厄に陥る、而るに自由黨員は溫柔沈着の人士に富み、何事を爲すにも平和的合法的手段に依頼するが故に、危害を買ふ事無きか故に、人目を聳動する壯快の業なく、其弊や往々因循不活潑たるを免れず、社會黨は重に新智識を具する青年學者を有すれども、自由黨には專ばら資産と地位ある老成家のみ多く、社會黨は他が漸く考思するところを已に公言し、他が明日爲さんとする者を今日斷行す、自由黨は小心翼翼苟くもせざるの長所あると共に、優柔不斷なる欠点の伴ふを免れず、此の如き兩黨の異同長短は、時としては双方連合一致の運動に出でしめ、又時としては反目疾視せしむる、恰かも我邦の自由黨と進歩黨とに似たるものあり。

反動派即ち保守黨は、其本營を政府部内に置き、軍隊と警察を以て

運動の武器と爲すが故に、數に於ては自由、社會の兩黨に劣ると雖ども、組織あり統一ありて一致團結に便利にして、其懸引亦巧妙なるが故に、他の兩黨に取つては怖るべき勁敵なり、彼等は固より確固たる主義政見を有するにあらず、唯だ感情若くは利害上より、他兩黨の政治運動に反抗せんが爲めに起りたる者にして、之を以て政黨と稱するは、少しく不當の嫌あるを免れざるなり。

此等政黨の歴史は、固より小冊子の盡す所に非れば、予は唯だ露國政黨の概況を陳ふるに止めん、自由、社會の兩黨は元來同一の革命黨にして、初めて團体的政治運動に着手せしは、千八百二十五年頃にして、實にニコラス一世の治世なりき、當時革命黨の勢力微弱にして内亂を起すも、直ちに政府の鎮壓する所となり、其の提供せし政綱は嘗て一も採用せられたる事なかりき、而も彼等は機に觸れ時に應じて、少しも運動を休止すること無かりしが、降つて千八百五十六年クリミア戦争の破裂は、一國を擧げて渦亂の中に投じぬ、闔國

齊しく革命黨の政綱を採用するに非れば、到底内憂外患の危急を救ふに足らざるを見たり、然るに一日改革を企てし亞歴山二世は、急に豹變して保守政策を執り、甚だしく露國人民を失望せしめたりと雖ども、佛蘭西西班牙等の革命を目前に見て、改革の急要は益々一般の認知する處となり、數十年來斯民の爲めに身命を擲つたる革命家の義烈は、甚だしく國民の感謝を呼び起し、政府の爲めに放逐流謫せられて歸國するものあるや、人民は恰かも凱旋將軍を迎ふるが如く歓迎したりき、斯くてヘルツェンは倫敦に於て秘密に新聞を發行するや、露國亡命の志士は彼を圍繞して一社會を形成し、ニコラス、ミリオーチン亦亞歴山二世の治世に、過激なる革命運動を演じて追放の身となり、革命の運動は一消一長一浮一沈、絶えて已むこと無かりしが、其功果として數ふべきは、千八百六十三年芬蘭の憲法改正、波蘭の土地分配、隸民制の廢止、政治新聞の發行等重なる者なるべし。

然れども此の如きは、未だ宿望の百分の一に達せず、况んや強力なる反動派の勃興に依りて、既得の特權をさへ撤回せられたる者多きをや、露國政界の形狀は未だ前途望洋の歎なくんばあらざりき、是に於てか慨世憂國の志士は踵を接して蹶起し、千八百七十一年ネッチーヴは少年氣銳の士のみを以て秘密結社を起し、事發覺して重刑に處せられ、ミカイル、バカウニン、ピトレ、ラヴロヴ等相尋るで罪囚の身となり、露國の公報に依れば、千八百七十三年より千八百七十九年に至る六年間、國事犯者數二千八百八十四人に上り多くは革命的若くは社會的運動の罪に因ると雖ども、中には單に人民に何事か教唆するところありしとの故を以て、獄囚の身となりし者もありき、是を以て推せば、革命運動の爲めに前後露國志士の流せし鮮血は、或は佛蘭西大革命に劣らざるものあらん、而して露國政府が國事犯者を遇する殘酷見るに忍びず、其牢獄は幅五歩に過ぎず、其食料は一日僅かに五「ペック」にして、罪人を圍繞する者は臭

死や遂に
和解せず

氣鼻を撲つ暗室と、鬼の如き獄吏と、黒き手を伸ばさんとする『死』
あるのみ、殊に國事犯者は青春多望の士多きが故に、彼等が多情多
感の性は、失望若くは感激の極、發狂する者多し、嗚呼此の如く幾
多少壯有爲の士を殺すも、皆斯民の爲めなりとせば、誰か彼等の爲
めに萬斛の涙を灑がざる者あらんや、少年革命家ヴェルボヴァニ
の詩は、最も能く這般の苦境を描寫せり、曰く『予や今隘き棺裡に腐
敗する死塊冷肉と擇ぶなきもいかで斯民の爲めに奮闘苦戦する愛世
志士に助力せざるべき勝敗分る、刹那には闇黒なる墳墓の内より思
はず彼等の幸運を絶叫するなり』死の遂に免るへからざるや、失望
の極彼は哀哭せり『死や遂に和解せず一旦予の身体を墳墓に運びて
は最早何事をも宥恕せず、予の意志も予の勢力も將た又予の憎惡も
皆彼の手に繋がれたり』と。
今や露國の革命黨は偏ねく全國に傳播し、諸方に秘密結社を組成し
て、隱謀不穩の舉動多く、大學内亦學生にして革命思想を抱く者夥

革命家軍
隊内に生

しく、政府は之を根絶せんとするも能はず、これ政府の大に憂慮措
く能はざる所なるのみか、千八百八十一年亞歷山三世は遂に凶徒の
手に殞れ、又千八百八十四年九月聖彼得堡に於ける裁判の結果に據
れば、アチエンブレネル大佐を初めとして、幾多有爲の軍人にして
て、密謀に加はれるを發見したり、已に國家の干城たる軍人にして
革命運動に加はれり、政府に取つては危險これより大なるは無し。

近世露西亞大尾

(第一) 平時陸軍々備表

| | 將 校 | 戰闘兵及 遊撃兵 | 馬 匹 |
|------------------------|--------|-------------|---------|
| 露西亞本部 (歐羅巴領) | 30,574 | 750,944 | 139,966 |
| アムール及イルクツク (東部西比利亞) | 773 | 24,993 | 3,218 |
| オムスク (西部西比利亞) | 557 | 10,799 | 4,403 |
| 土耳其斯坦 | 1,280 | 38,468 | 5,971 |
| 芬 蘭 | 345 | 9,939 | 920 |
| 總 計 | 33,529 | 835,143 | 155,478 |

(第二) 戰時陸軍々備

| | 將 校 | 戰闘兵及 遊撃兵 | 馬 匹 | 砲 數 |
|--------|--------|-------------|---------|-------|
| 露西亞本部 | 51,353 | 2,359,720 | 462,917 | |
| 東部西比利亞 | 1,134 | 44,224 | 7,807 | |
| 西部西比利亞 | 773 | 32,438 | 13,425 | |
| 土耳其斯坦 | 1,286 | 51,610 | 10,680 | |
| 芬 蘭 | 511 | 24,151 | 2,586 | |
| 總 計 | 54,957 | 2,512,143 | 497,415 | 5,264 |

附 錄

◎露國兵勢一覽表

(最近萬國政治家年鑑に據る)

第三 軍艦一覽表

| | 巴爾的海 | | 黑 海 | | 西 比 利 亞 (東洋艦隊) | | 總計 |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------------------|-------|----|
| | 既成 | 工事中 | 既成 | 工事中 | 既成 | 工事中 | |
| 一等 戰艦 | 8 | 3 | 7 | 9 | | | 19 |
| 二等 ククク | | | | | | | |
| 三等 ククク | 1 | | | | | | |
| 港内防禦艦 | 12 | | 2 | | 2 | | 16 |
| 一等 巡洋艦(a) | 8 | 3 | | | 1 | | 14 |
| 一等 ククク(b) | 2 | | | | | | |
| 二等 ククク | | 1 | 1 | | 1 | | 3 |
| 三等 ククク(a) | 12 | 1 | 9 | | 8 | | 30 |
| 三等 ククク(b) | 12 | | 12 | | 1 | | 25 |
| 一等 水雷艇 | 28 | 24 | 20 | | 6 | | 80 |
| 二等 ククク | | | 1 | | | | |
| 三等 ククク | | | 1 | | | | |

明治卅二年一月六日印刷
明治卅二年一月十日發行

定價金拾貳錢

著 者

占部百太郎

東京市赤坂區靈町五十五番地

發行者

隅谷巳三郎

東京京橋區彌左衛門町十番地

發行所

開拓社

東京京橋區彌左衛門町十番地

印刷者

多田榮次

東京市神田區小川町壹番地

印刷所

愛善社

東京市神田區小川町壹番地



新刊廣告

社會之進化

洋裝美本全一冊
定價金卅五錢
郵税金四錢

一個人の進化を論ずる者あれども社會の進化を論ずるもの少なし
社會もまた一の活動也其進化の法を知るを得ば經倫の大策自から湧
かん

英人キッド、曠世の博學、深慮を以て社會進化論を出すや歐洲の思
想社會駭然として驚き近世の大著述にして世論を動かしたるもの數
種の其一とす

我社が此書を譯出したるは以て貧寒なる我思想界を富さんが爲め也

發賣元

東京市京橋區彌
左衛門町十番地

開

拓

社

世界之日本叢書の發行

明治二十七年我艦隊が支那艦隊を黃海に壊滅せしむるや、國老某氏、
且つ喜び且つ賀して涕泣滂沱として曰く、余は此勝利を耳にし、此
海軍を有するを見、奈翁が佛國に出でたるよりも深く我國のため
賀すべきものあるを信ず、何となれば佛國の勝利は一の奈翁の天才
によりて、万民が引率せられたるものにして、其人去つて其の事空し
からんとす、今や我國家奈翁あるにあらず、ネルソンあるにあらず、
而して紀律と、技術と、愛國心によりて、此大勝を博す、此兵士た
るや奈翁去ると雖も共に去らず、日本國民のあらんかぎり存するの
兵士なれば也と、此語は移して以て立憲政治を評すべし、立憲政体
は英雄豪傑によりて維持せらるゝものにあらずして多數の人民によ
りて維持せらるゝもの也、故に立憲政体の世に方りて、非常卓異の
豪傑を待ち設くるは、あり得べからざるを望む謬見にして、寧ろ多
數人民をして、英雄豪傑に類似せしむるの手段を取るの、捷徑なる
に如かざる也、
而して多數人民をして、立憲政体を維持するの要素たらしめんとせ
ば彼等をして時務に適應する政治的智識を有し、政治的智識を有せ

しめざるべからず、然るに我政治家多く多数人民の感情を鼓舞するを勉めて此事を怠る、是れ我輩の久しく遺憾とする所也、今や同人相會し世界之日本叢書を發行し一世の大題目に關して、簡潔なる説明を爲さんと欲するもの、また此意に外ならず、英國に於ては已に議員として令名あるシドニー、バクストン氏主として、前のカナダの太守ロルン侯、議員ラスボン、アルベルト、ベル、モンターグ氏等相會して、政治叢書を發行して、政治上の大題目に關して、卑切深切の説明を興ふ、英國人民政治上の智識之がために發達せしや、計るべからざるものあり、我輩同人の期する所もまた此に外ならず、

我輩は此書を刊行するに方りて、必しも政治上の同志のみに依頼せず、各々其専門、所長につきて信用する所に依頼すること、せり、是れ此の如き叢書は成るべく黨派若しくは學派の偏見を交ゆべきものにあらずれば也、江湖の君子願はくは此書を推薦して、國民の政治的智識を進めんことを、

明治三十一年十二月

開

拓

社

| |
|-----|
| 71 |
| |
| 111 |

1942
1943
1944
1945
1946
1947
1948
1949
1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022
2023
2024
2025